国総研セミナー

−各援助国の「開発と女性」への取り組み−

平成３年８月７日

国際協力事業団
国際協力総合研修所

ARY

総　研
J　R
91 − 51

JICA LIBRARY
1093924(7)

22997

国総研セミナー

ー各援助国の「開発と女性」への取り組みー

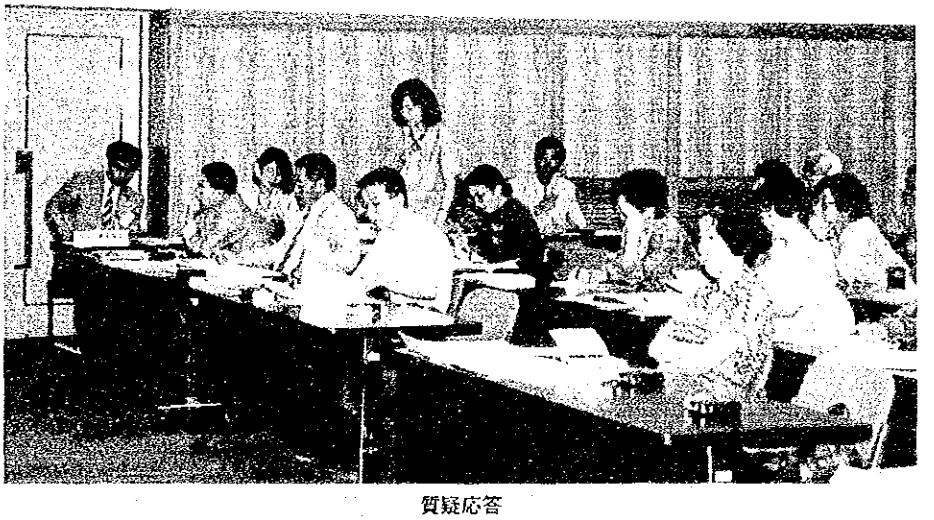
JICA

国際協力事業団
22997

国総研セミナー

各援助国の「開発と女性」への取り組み

セミナー講師



質疑応答

はじめに

「開発と女性（Women in Development）」は、1975年の世界婦人年をきっかけとして国際的な課題として認識を得、1990年代の開発援助の優先課題のひとつとして位置付けられています。

我が国の援助機関として、国際協力事業団でも「開発と女性（WID）」の事業への組み込みを開始しており、平成2年には、分野別援助研究の一環として、外部有識者からなる研究会を設置し、開発途上国の社会・経済における女性の役割についての現状を分析するとともに、女性が受益者としてだけでなく、その主体的な担い手として十分に参画しうる開発を支援するための援助のあり方について検討を行いました。この研究会の検討の結果をまとめた報告書は、本年2月に研究会座長の目黒上智大学教授から、国際協力事業団総裁に提出され、現在当事業団ではこの中に盛り込まれた多くの提言を実現すべく種々の取組に着手したところでございます。

その取組のひとつとして、本年5月に、当事業団企画部内に環境・WID等事業推進室を設け、WID担当の職員を指名し、国別、分野別に行われている技術協力事業の中に、横断的な視点としてWIDを組み込んで行くための企画調整をおこなっております。

また、当研修所におきましても、海外からの研修員受け入れプログラムの一環として総理府のご協力をいただき昨年から婦人問題ナショナル・マシーナリーセミナーを実施するとともに、今年からは「開発と女性」に焦点を当てた日本人開発専門家を養成するための研修を発足させる予定でございます。

本報告書は、平成3年8月7日に実施された国総研セミナー「各援助国の『開発と女性』への取組」の講演と討論の内容を取りまとめたものです。このセミナーでは、経済協力開発機構（OECD）の開発援助委員会（DAC）の中に設けられているWID専門家グループのメンバーのうち4か国の代表に、それぞれの国の政府開発援助がWIDにどのように取り組んで来たかを紹介していただきました。講師は、各国の援助機関の中でWIDを推進し、実行する立場にあるかたがたです。

ここで紹介された各国の開発援助の現場から得られた貴重な経験や教訓を、我が国がこれからWIDに取り組んで行く際の参考にさせて頂ければ幸いです。

末筆ながら、本セミナーの開催にあたり多大なるご協力を賜りました外務省、海外経済協力基金をはじめとする関係の皆様に厚く御礼申しあげます。

平成3年10月

国際協力事業団
国際協力総合研修所
所長　河西　明

目　次

はじめに……i
国際協力総合研修所長　河西　明

プログラム……3

講師略歴……5

各国のＷＩＤへの取り組み紹介……7

講師紹介……9
国際協力総合研修所調査研究課長　狩野良昭

(1)ＷＩＤ、ジェンダー、開発協力：過去の教訓……12
ノルウェー外務省経済協力局長　ビョルグ・レイテ

(2)「開発と女性」政策の新しい概念：オランダの協力プログラムの経験……18
オランダ外務省国際協力局　スーザン・ブランカート

(3)フィージビリティ調査やプロジェクト・デザインへのジェンダー分析の活用
－オーストラリアの経験－……21
オーストラリア国際開発庁　アン・ジョンストン

(4)開発援助のなかのジェンダー……28
イギリス海外開発庁　ロザリンド・エイベン

質疑応答……33

‹資　料›

1 The Utilisation of Gender Analysis in Feasibility Studies and Project Design……51

2 Checklist for the Participation of Women in Development Projects……69

プログラム

平成３年８月７日　１４：００～１７：００
August 7, 1991　14:00～17:00

1．開会挨拶　国際協力総合研修所長　河西　明　14:00~14:10

Opening Address by Mr. Akira Kasai
Managing Director of the Institute
for International Cooperation, JICA

2．講師紹介　14:10~14:25

Introduction of Resource Persons

3．各国のＷＩＤへの取り組み紹介　14:25~15:25

Presentation by WID Experts

(1)ＷＩＤ、ジェンダー、開発協力：過去の教訓　14:25~14:40

WID, Gender and Development Cooperation: Lessons Learned

ビョルグ・レイテ　ノルウェー外務省　経済協力局長
Ms. Bjørg Leite　Director-General, Department Cooperation Programmes,
(Norway)　Ministry of Foreign Affairs

(2)「開発と女性」政策の新しい概念：オランダの協力プログラムの経験　14:40~14:55

New Concept in Women and Development Policy: Experience in the Netherlands Cooperation Programme

スーザン・ブランカート　オランダ外務省国際協力局 WID特別プログラム上級コーディネーター
Ms. Susan Blankhart　Senior Officer, Special Programme on WID
(Netherlands)　Directorate-General for International Co-operation,
Ministry of Foreign Affairs

(3)フィージビリティ調査やプロジェクト・デザインへのジェンダー分析の活用
－オーストラリアの経験－ 14:55~15:10

The Utilization of Gender Analysis in Feasibility Studies and Project Design:
The Australian Experience

アン・ジョンストン	オーストラリア国際開発庁 WID•保健•人口アドバイザー
Ms. Anne Johnston	Advisor, Women in Development, Health and Population,
(Australia)	Pacific Regional Team
	Austrailan International Development Bureau(AIDAB)

(4)開発援助のなかのジェンダー 15:10~15:25

Gender Dimension of Development Assistance

ロザリンド・エイベン	イギリス海外開発庁 社会開発上級アドバイザー
Ms. Rosalind Eyben	Senior Social Development Advisor,
(U. K.)	Overseas Development Administration(ODA)

4．コーヒー・ブレイク 15:25~15:40
Coffee Break

5．質疑応答 15:40~17:00
Discussion

6．閉　会 15:00
Closing

講師略歴

●ビョルグ・レイテ (Bjørg Leite)

ノルウェー外務省経済協力局長

(Director-General, Department Cooperation Programmes, Ministry of Foreign Affairs)

1970年代に女性運動に参加、ノルウェー女性の権利拡張のために力を注ぐ。オスロ女性の権利協会会長、男女平等協議会会長を歴任。1976-78年消費者問題および行政省にて大臣付き政治秘書。その後開発協力庁、ノルウェー外務省での10年を越える経験を経て、1988年外務省経済協力局長に就任。その他、1983－89年UNIFEMの諮問委員会会員。1989-91年WIDに関するDAC専門家グループ議長。1991年12月より開発協力庁モザンビーク事務所所長就任の予定。

●スーザン・ブランカート (Suzan Blankhart)

オランダ外務省国際協力局WID特別プログラム上級コーディネーター

(Senior Officer, Special Programme on WID, Director-General for International Cooperation, Ministry of Foreign Affairs)

大学で開発途上国の社会地理学を専攻し、卒業後インドネシア、ケニア、ザンビアで都市計画の専門家として仕事をする。1983年オランダ外務省国際協力局に入局し、2年間対南アジア二国間援助プログラムを担当。1987年同省国際女性問題コーディネーターに就任。1989年よりUNIFEMの審議会における西側諸国(日本、オーストラリア、ニュージーランドを含む)代表。

●アン・ジョンストン (Anne Johnston)

オーストラリア国際開発庁 太平洋チーム WID・保健・人口アドバイザー

(Advisor for Women in Development, Health and Population, Pacific Regional Team Australian International Development Bureau)

社会学、コミュニケーション、看護学、公衆衛生の分野で学位を取得。アメリカ、東南アジア、オーストラリアの諸大学で講師をつとめるかたわら、国際開発庁がスタッフを対象として実施するジェンダー分析訓練の指導や、コンサルタントのためのWID活動指針の作成にもあたる。WID専門家として、ネパール、パプア・ニューギニア、ヴァヌアツ、ソロモン諸島などで、プロジェクトの実施可能性、設計、評価調査団に参加したほか、中央アメリカでの保健教育プログラムのマネージャーとして、またアメリカのヒスパニック系移民に対する地域保健ワーカーとして活躍した経験を持つ。

●ロザリンド・エイベン(Rosalind Eyben)

イギリス海外開発庁 社会開発上級アドバイザー

(Senior Social Development Advisor, Overseas Development Administration)

ブルンディでのフィールド調査をもとに人類学の博士号を取得。博物館館長、大学講師を経て、開発援助に携わる。国際労働機関(ILO)勤務後、フリーのコンサルタントとして、アフリカの開発問題を中心に様々な国際機関の仕事を請け負う。1986年、英国海外開発庁の社会開発アドバイザーとなり、アジア、アフリカ諸国におけるプロジェクト設計、政策形成、戦略的プランニングなどの様々な仕事をこなす。特に、海外開発庁が行うすべての活動に女性の視点を組み込むことに尽力。現在、開発援助委員会(DAC)のWID専門家グループ議長をつとめる。

《討論参加者》

●インゲボルグ・ストフリング(Ingebjørg Støfring)

ノルウェー開発協力庁 女性・環境ユニット アドバイザー

(Advisor, Women and Environment Affairs Unit, Norwegian Agency for Development Cooperation (NORAD))

●ステファニー・ベイル(Stephanie Baile)

経済開発協力機構 開発援助委員会事務局 援助管理部職員

(Administrator, Aid Management Division, Organization for Economic Cooperation and Development (OECD))

●九重匡江(Masae Kuno)

外務省経済協力局国際機構課長補佐

各国のWIDへの取り組み

司会：　ただいまから国総研セミナーを開催させていただきます。

私は本日の司会を務めさせていただきます国際協力事業団国際協力総合研修所の狩野でございます。よろしくお願い致します。『各援助国の「開発と女性」への取り組み』と銘打ちました国総研セミナーにようこそお出でくださいました。

初めに、お忙しいところお越しいただき、本日の講演をしていただきます経済開発協力機構（OECD）の開発援助委員会（DAC）に設けられておりますWID専門家グループのビューローメンバーである講師の方々にお礼申し上げます。

講師紹介

司会：　それではただいまから講師を紹介させていただきます。皆さまから向かいまして左側から、オーストラリア国際開発庁、AIDABのアン・ジョンストンさんです。続きましてオランダ外務省のスーザン・ブランカートさんです。3番目がWID専門家グループの前議長でありましたノルウェー外務省経済協力局長でありますビョルグ・レイテさんです。そのお隣が同じくノルウェーのインゲボルグ・ストフリングさんでございます。続きまして、イギリス海外開発庁、ODAのロザリンド・エイベンさんです。続きまして経済開発協力機構（OECD）、開発援助委員会（DAC）のステファニー・ベイルさんです。最後に日本側の本専門家会議のビューローメンバーであります外務省経済協力局国際機構課長補佐の九重さんです。

本セミナーは、お手元に配布致しましたプログラムにあります通り、4つの援助国の開発援助の取り組みの講演をお願い致しております。その後、コーヒー・ブレイクをとらせていただきまして、質疑応答のセッションを考えております。皆さま方との率直な意見交換をお願いしたいと思います。意見交換を効率的に実施するため、質問等がございましたらお配り致しました質問用紙にご記入のうえ、コーヒー・ブレイクの際に受付の箱にお入れくださいますようお願い致します。

それではこれから講演をお願いしようと思いますが、その前にDACのステファニー・ベイルさんに、WID専門家グループにつきまして簡単にご説明をお願いしたいと思います。ベイルさん、お願い致します。

ベイル：　ありがとうございます。OECDとDACについてお話ししたいと思います。OECDは経済開発協力機構でありますけれども、パリに本部があります。1960年にできあがった国際機関です。24ヵ国の加盟国政府があります。そして先進国が加盟国となっていまして、民主国家で市場経済諸国、これらの国々が加盟国です。ほとんどが西欧諸国、そしてアメリカ、太平洋諸国では日本、オーストラリア、ニ

ュージーランドが加盟しております。

OECDは基本的には、話し合いの場、枠組みを提供するフォーラムです。先進国におけるいろいろな経済政策の策定のために話し合いをするところであります。一国の国がいろいろな省に分かれているのと同様に、OECDの組織内では各省の代わりにいろいろな委員会があります。例えば、運輸委員会、環境委員会、社会問題委員会、その他、いろいろな委員会が設置されているわけです。

DACというのは開発援助委員会です。開発に関わる協力について、話し合いをする場になっております。DACは19ヵ国の加盟国がありまして、世銀とIMFがそれぞれオブザーバーになっております。そして毎年いろいろな会合を開きます。日本からもOECD駐在日本政府代表部から、日本政府の代表がDACに参加しておられるわけです。そしてスペシャリスト、専門官を加盟国が本部に送り、自国の見解を表明するというかたちをとっております。

私がメンバーになっているのは国際事務局というところです。DACの加盟諸国のためにいろいろと窓口となってサービスを提供する事務局がありまして、そこにいるわけです。開発援助に関わる政策作りだけではなくて、全加盟国を対象としたいろいろな統計作りもするわけです。それから贈与であるとか、信用供与に関わる統計、また地理的にどのような条件でどのような地域、あるいはどのような国にタイド、あるいはアンタイドでというように、どういった類の援助が行われているか、ということに関する統計をとります。

また特定の問題に関するモニターも致します。昨年、今年は都市開発問題、教育問題、人口問題、そして環境問題をモニターすることに致しました。DACとしては、加盟国が開発援助政策を策定する際に、質の高い政策を立案することができるよう、役に立とうと仕事をしているわけです。

DACでは、コンセンサスによっていろいろなことに関する意思決定をします。例えば、プロジェクトの評価の仕方に関して、プロジェクトがよいプロジェクトであるかどうかを評価する仕方に関する手続きについて、コンセンサスで決めていくということです。そういったコンセンサスに基づきまして、開発援助の評価に関するガイドラインをすでに作っております。

もう1つ、DACの重要な役割として、加盟国の開発援助政策の評価があります。日本は今年の6月にレビューを受けております。レビューを受けるということは、日本の開発援助の政策に関して、他の国からいろいろな質問を受ける。そしてそれに対して日本が答える。それに基づいて日本の政策に対して総合的な評価をするということです。

諮問機関もあります。資金的な面に関する諮問機関と、統計に関連する諮問委員会があります。それからあと3つは、いろいろな分野を網羅する総合的な諮問委員会です。そのうちの1つにWIDの専門家グループがあるわけです。もう1つ、援助の評価に関する専門家グループ、それから環境に関する専門家、諮問委員会があります。日本の九重(くのう)さんはこのWID専門家グループのメンバーでいらっしゃいます。役員、ビューローの一人となっておられますので、いろいろな説明を九重さんの方からもしていただけると思います。

九重：　日本を代表してWID専門家グループ役員団のメンバーを務めさせていただいております。先ほどから、皆さまよりいろいろご説明がありまして、いまから私が申し上げることはほとんど重複しているように思いますけれども、簡単に説明させていただきます。

ここにいらっしゃるイギリス、オーストラリア、オランダ、ノルウェーの方々、およびDAC事務局の方は、OECDのDACのWID専門家グループ役員団会合に出席するため来日していらっしゃいます。役員団会合は8月8日、9日の両日、外務省において開催されることになっております。役員団はWID専門家グループの年次会合において選出され、年に数回会合を持ちまして、問題を処理し、事務局と交渉し、次回年次会合の準備をしたりしております。

役員団の任期は1年で、現在イギリス、オーストラリア、オランダ、ノルウェーおよび日本の5ヵ国で構成されております。役員団会合は持ち回りで開催されておりまして、いままでノルウェー、イギリス等で開催されてきました。今回、東京で開催されることになったため、皆さんがここに来ていらっしゃるわけです。

WID専門家グループはDACの5つの下部組織の1つですが、18ヵ国とECの計19メンバーで構成されております。年に一度、年次会合を持ち、さらに年に一度セミナーを開催しております。過去のセミナーのテーマとしては、「環境と女性」「構造調整と女性」「参加型開発」があります。WID専門家グループの最大の功績は、WID指導原則を策定したことであると言われております。1983年にDAC上級会合で採択され、1989年にはその後の状況に応じて改定されております。

WID専門家グループは3年に一度、このWID指導原則の実施状況をモニターして報告にまとめ、発表しております。本日ここにいらっしゃる方々は、WID専門家グループの中心的な方々で、WIDをここまで引っ張っていらした方々で、いわばWIDの牽引車、ロコモーティブの役目を果たしていらっしゃる方々です。

司会：　どうもありがとうございました。それではさっそく各国のWIDの取り組みにつきまして、ご紹介をお願い致します。初めにノルウェー外務省経済協力局長であ

りますビョルグ・レイテさんに、『WID、ジェンダー、開発協力：過去の教訓』というタイトルで講演をお願い致します。

(1) WID、ジェンダー、開発協力：過去の教訓

ビョルグ・レイテ

ご紹介ありがとうございます。私はこのDACビューローの最初のスピーカーとなりますので、この機会を拝借致しましてホストの方々、日本の当局の方々に、このセミナーをアレンジしてくださいましたことに感謝し、そしてビューローミーティングを東京で主催してくださいますことに関して、感謝の意を述べさせていただきたいと思います。また個人的にも、このビューローの九重さんに対しまして、謝意を述べさせていただきたいと思います。過去2年間にわたり、九重さんはこのビューローのスムーズな進展にいろいろと寄与してくださいました。このセミナーを通して、私どもは効果的に女性の問題を推進していくいろいろな方法を検討することができるわけで、それを通じて、全体的な開発援助の効率を高めることができるのではないかと思います。

日本に対しては、WIDを議題にはっきりと示してくださったことに感謝したいと思います。日本がWIDを推進するに当たりまして、指導的な役割を果たしてくださったならば、非常に大きなインパクトを与えることができると思います。日本の声は世銀でも国連でも、その他の国際機関においても、ますます耳を傾けられるようになってきています。そういう意味において、WIDの活動を日本が支持してくださることになりますと、私どものようにこのような問題に取り組んできたものにとりましては、非常に心強いわけです。

私どもは15年間にわたりまして、WIDに関するいろいろな分野の研究をしてきたわけで、そういう研究を日本と分かち合うことができることは非常にうれしいことです。次の段階としては、WIDとジェンダーの問題を上から下まで組織化していくことが非常に大事なテーマだと考えます。そして効果的に問題に対処していく方法を見つけることが大事だと思います。

私はこの段階において、日本にとってなにがもっとも有効であるかということを考えてきたわけですが、私たちが具体的な、理想的なWIDモデルを持っているわけではありません。それぞれの国がWIDとジェンダーに関してのモデルを作っていくものではないかと思います。行政的な伝統、あるいは官僚機構のなかでのいろいろな実施の方法に合

ったものが必要なのではないかと思います。そういうものにバックアップされてこそ、WIDのプログラムとプロジェクトは効果的に支援されていくものだと思います。

ということで、私は日本の開発援助についての方向をいろいろ検討してきたわけですけれども、日本にとっていくつかの大事な点があるのではないかと思いました。それを私どもの経験に照らし合わせて、どういうふうにして方向づけたらいいのかということについて、少し考えてみたわけです。

ノルウェーでは、1985年にWIDの戦略を採用したわけですが、そういう経験を日本の方々と共有していきたいと考えているわけです。これに関しての資料は出ておりますので、皆さんのお手元にいずれ届くように手配していただきたいと思います。

ストフリングさんは、今度ビューローメンバーとして私と交代するわけですけれども、この方はNORADのなかでも重要な役割を果たしていらっしゃる方です。NORADはノルウェーのJICAに相当するものです。もう少し詳しいことを聞きたいという方がいらっしゃいましたら、後ほど彼女にも質問を受けていただきたいと思います。

ノルウェーでは日本と同じように活発な女性運動が行われています。開発協力においても大きな役割を果たしてきて、ロビーとして活躍してきているわけです。WIDのプログラムを推進していくうえで、ノルウェーの女性の運動は非常に重要な役割を果たしております。そして実際に援助の推進に当たりまして、それをモニターする役割も果たしてきています。もちろん、このようなプログラムを推進していく過程において、不快な面も伴ったわけですけれども、私どもとしてはこれらのプログラムを十分に注意しながら推進していくという姿勢を保つことができました。そういう意味で非常に役立ったと言えるわけです。また私どもの開発援助の計画においても、大きな貢献をしてきたと言えると思います。そういう意味において、日本の当局の方々にもWIDの活動を展開する際に、女性運動家たちとの連携をお願いしたいと思います。

1970年代の前半に、いろいろな開発に関する協力が分析の対象となりました。その当時ノルウェーでは女性問題を扱う1つの機構作りが考えられており、1972年にはノルウェーのイコール・ステータス・カウンシルという女性の機会均等を検討する協議会が設立されました。これはケニアの政府が女性局を設立したのとだいたい同じ時期でした。

それぞれの国々には、女性問題についてのそれぞれの扱い方があるわけです。それがWIDの枠組みのなかで扱われる時にも、同じようなかたちで展開されているということに注目すべき点があると思います。

ノルウェーではもちろん女性は母親であり、また夫のよき妻であるという役割があるわけです。それは基本的な役割として認識されているわけですけれども、そういう現実において健康、保健、家族計画、および栄養問題に関しましては、女性はその面でのい

ろいろなプログラムの利益を得る受益者として考えられていたわけです。

そして実際の支援の10％は、このような種類の福祉的なプログラムに向けられていたわけですが、実際に生産活動、特に農業に係わる女性の役割に対する支援はあまりありませんでした。例えば、農業生産に従事する女性の問題に対する対応は遅れていました。例えば、妊産婦が相当量の農業労働を担っているという現実を無視した保健プログラムは有効ではないということがあります。そういう状況において女性の労働の権利がうたわれるようになったわけです。

1970年代のなかごろには、機会の均等を求める動き、あるいは貧困を一掃するための女性運動が活発になってきました。そして開発の過程において、女性は非常に活発な役割を果たすようになりまして、再生産を担うと同時に、労働による生産を行う役割が認められるようになってきたわけです。

その過程において、開発途上国とともに対話を進めていくことも進んできたわけです。最初の段階においては、対話は非常に微妙なかたちで展開されました。男性が非常に不安定な立場を示したからです。しかし、実際に支援を行われる対象が女性ということになりますと、女性の立場は非常に強くなるわけで、そういうような女性に対する対応策を強力に推進していくことになったわけです。そして国連の女性問題を扱う会議の決議などにバックアップされまして、被援助国側もWIDの問題をとりあげるようになりました。各国においても、いろいろな協議を通じまして、WID関連の問題が重要視されるようになっていったわけです。

開発途上国の貧しい人たちの多くは女性であるということで、貧困の問題を払拭することも非常に大事な点であったわけです。しかし初期の段階におきましては、貧困対策の多くがジェンダーの問題を対象としていませんでした。どちらかと言うと女性の生産性、あるいは再生産の問題が重視されてきたわけです。私どもと致しましては、日本が女性の問題を非常に深刻な問題として検討していただくことをお願いしたいと思います。

80年代の初期において、WIDを推進するに当たりまして、効率的なアプローチをとることに致しました。これは女性が開発における非常に重要な役割を担う媒体であると認めて、必要な金銭的投資を行うことが、効率的な女性の活用には不可欠であるということを強調するものです。女性は搾取されがちな立場にあるわけですけれども、それは権利構造のなかに織り込まれていないからです。例えば、労働生産においても、安価な労働力として搾取される可能性が非常に強いのは女性であるわけです。

このような問題を背景として、効率的なアプローチをとることによりまして、WIDの問題を中心的に理解していくなかで、女性をどういうかたちで問題として扱っていけば

いいかということが明確になったと思います。80年代のなかごろになりまして、WIDはエンパワーメント・ストラテジーという戦略を導入することになったわけです。それは女性にさらに権力を担うように力づけるアプローチでありました。経済的にも、文化的にも、政治的にも、立場を築くことができるようなアプローチをとりました。これらのアプローチはそれぞれ相反するものではありません。それぞれ相互に受け入れながら、組み合わさってWIDのプロジェクトのなかで推進されるべき方向であったわけです。

1985年にノルウェーでは初めてのWID戦略が採用されました。これは、この会場の外にあります資料にも表になって出ておりますので、ご覧いただきたいと思います。まず部門別に優先順位を付けることに致しました。それはすべての分野に平等に資金を提供するということはできなかったからです。そこで部門としては、開発の可能性がもっとも大きく、支援がもっとも少なくて済むような部分が重要視されたわけです。例えば、石油化学の分野においては、WIDの問題を識別することは非常に難しいということになりましたのでそれよりさらに直接的な影響のある農業生産部門が最初に重視されたわけです。

全体的にいろいろなプロジェクトやプログラムとWIDの戦略を関連させることが非常に大事でありました。私どもは過去数年にわたりましてWIDの戦略の重点目標として「メインストリーミング」の努力をしてきたわけです。このやり方に関しても、資料が会場の外にあります。実際に行われたことに関しての評価は、それほど数多くないわけです。ですから皆さま方にご参考にしていただきまして、私どものやり方がどんなものであったかということを見ていただいて、将来の方向を決めていただきたいと思います。

アジア、アフリカの諸国のいくつかの国を特定して援助してきたということはノルウェーの援助の1つの特徴であると思います。日本もカントリープログラムを将来考えているということですので、アドバイスとしてはカントリープログラムのなかに女性の役割を検討しておくことが必要だと思います。最初から入れておくことが大事なのではないかということを一言申し上げておきたいと思います。女性をプログラムのなかの中心的な存在として位置づけ、そのプログラムを推進することを考えることが非常に大事なのではないかと思います。

女性問題をカントリープログラムのなかに導入することは、やはり受け入れ国の方でもそれに対する認識を高めてもらうことが必要であるということを意味するわけです。国連の女性の戦略の提言に従いまして、女性の問題をハイレベルの交渉のテーブルにおいても扱いやすくなったわけです。1つの戦略的なやり方として、議論が起きておりますのは、開発における女性の問題を扱う時に、1つの資金枠を設けて、女性中心の問題を解決していく際にその資金を使う戦略が見られたわけです。

目的としては、いろいろなプログラムを推進し、女性の問題を開発問題のなかに統合していく1つの支援とするということでありました。これによっていろいろな女性のイニシアティブを柔軟かつ有効に活用することができるようになったわけです。通常の行政的な措置では十分にうまくいかないようなものに力を注ぐことができました。そして私どものやりたいことには、資金のバックアップがあるのだということを力として得て、自信を持って女性問題に関わる部分を推進していくことができるようになったという意味において、この資金は非常にパイオニア的な役割を果たしてきたと思います。WIDの哲学を生かす意味においても、このやり方は効果があるのではないかと思います。これについても、資料があります。

いろいろなWIDの戦略を実施するうえでの評価を行う時には、実際にこのような問題を中心的な問題として扱う際に、効果的な方法が導入されたかどうかということを評価することも大事であるわけです。メインストリームという言葉を使いまして、女性問題が開発戦略のなかに取り入れられているかどうかということを明確に把握することが非常に大事で、そのような問題が取り入れられているかどうかということがわかるために、透明度を高くすることが非常に大事であるわけです。

女性問題が取り扱われていることを明確にすることが、WIDの問題を推進していくうえで非常に大事であると思います。そのような評価を行う際には、フィールドオフィスの役割も非常に大事になってくるわけです。それからWIDの担当部署では、WIDの問題を取り扱うことになりますと、通常の仕事のうえにもう1つ新たな仕事が加わるということで、非常に仕事が大量に負担となって、オフィスの人たちの肩にかかってくることが明らかになりました。

そういうことで、すべてのレベルのマネージメントに対して、WIDの戦略が実際に実施されることを確認することを1つの責務と致しました。そしてそれぞれのフィールドオフィスからのアドバイスを受けて、最終的な評価を行うような構造が大事であることを認識致しております。WIDの担当は、1年に1回オスロで会合致しまして、評価をもらっております。最終的には大臣との接触もありまして、ノルウェーの開発協力省の大臣は通常女性でありますので、そういう意味において女性問題が開発プロジェクトのなかにどのようなかたちで導入されていくのかということを確認するうえでも、大臣との接触は非常に意味があると思います。

政策対話、あるいはプログラムの支援がプロジェクトタイプの協力よりも大事なのではないかと、私どもは思っております。そういう意味において、日本もそういう視点に立っての改善をなさることも、1つではないかと思います。DACでの作業を見てみましても、女性問題を各種のプログラムのなかで識別していくのは非常に難しいことが明ら

かになっています。またモニターのためのシステムを構築することも非常に難しいことが、この経験からも明らかになっております。ですから1990年代においては、この点をどのようにしていくかということをさらに検討する必要があると思います。そしてWIDの対話を推進していくことが、この時代においてはますます大事になってくるのではないかと考えます。

さてまとめに入りますけれども、女性問題と男性の関わりに関して考えてみますと、女性と男性との力関係が、社会の状況の変化によりましてだんだんと変わってくるわけです。そのような関係でお互いの役割を考えていかなければならないと思います。権力の分配は、女性と男性の間でもっと平等になっていかなければならないと思います。伝統的な女性の役割をこえた役割が、女性に担われていくようになっていかなければならないと思います。今日のセミナーにおいても、少しは男性の方が参加してくださっているということは、男性の力を借りるという意味においても、また男性の認識を得ることが重要であるという意味においても、私どもにとっては非常に心強いことです。

開発計画において、女性問題を1つの問題として取り上げることは、開発のプロセスにおいて女性と男性の役割はどうあるべきであるかということを明らかにしていくうえでも大事でありますし、女性の役割を高めていくうえでも大事なものです。女性の生活を向上させるためには、やはり女性の労働負担とその役割が社会で公平に分担されることが必要であるわけです。そういう意味において、90年代においては男性の役割の再検討も大事なのではないかと思います。

女性は、いま男性の問題をここで取り上げることは時期尚早であると言う人も多いわけです。まず最初に女性の問題を解決してから、男性との関わりを見るべきであると言っている人たちもいますけれども、私どもとしては両方検討することが非常に大事だと思っております。こういう問題を将来のチャレンジとして、私のまとめとさせていただきたいと思います。

司会：　どうもありがとうございました。時間の都合で恐縮ですが、質問を一括してコーヒー・ブレイクのあとにさせていただきます。よろしくお願い致します。

続きまして、オランダ外務省のスーザン・ブランカートさんに、『「開発と女性」政策の新しい概念：オランダの協力プログラムの経験』についてお話しいただきたいと思います。

それではブランカートさん、よろしくお願い致します。

(2)「開発と女性」政策の新しい概念：オランダの協力プログラムの経験

スーザン・ブランカート

ありがとうございます。私の方からも日本政府にお礼を申し上げたいと思います。本セミナーにお招きいただきましてありがとうございます。最近、JICAが行われました開発援助、WIDに関連する研究を実施されましたけれども、非常にいい研究をなさっておられるということで、お祝いを申し上げたいと思います。またOECFに対しても、WIDに関して最近出されましたガイドラインは大変すばらしいものだと思っております。

今回、このような意見交換の機会を与えられまして大変うれしく思います。私はオランダの経験を皆さんにご紹介させていただきたいと思います。特に「開発と女性」政策に関して、新しい概念をご紹介させていただきます。オランダの協力プログラムの経験に照らし合わせての新しい概念です。特に最近数年間の経験をもとに、新しい考え方が出てきたわけです。経済、政治の開発プロセスが、女性の地位にあまりよい意味での効果を上げていないということが、過去の経験からわかっているわけです。

開発モデルのなかに女性がまったく入っていないということが、まず言えることです。開発モデルのなかに、女性の生活のいろいろな側面が考慮に入れられていないということです。女性は子供を育てる。そして報酬があろうとなかろうと、生産的な作業に就くこともあれば、家事をすることもありますし、地域社会での仕事も致します。このような複雑な複数の側面を持つ女性の役割を考慮に入れたかたちで、開発モデルにそれを組み込むことがなされていないことが、過去の経験からわかっております。

それから第2点として申し上げたいことは、開発モデルを見てみますと、アプローチが多かれ少なかれ、全体的な開発のための努力のなかに女性を巻き込んでいく努力があまりなされていない、ある程度は行われていますが、もっと積極的に数多くの女性がいろいろな活動に参画をしていく必要がある。その必要性は認識されているわけですけれども、現在は開発の努力に統合されていないわけです。実際には生産的な作業を行ったり、あるいは子供を生み、育てるという作業のなかで、大いに開発に役立っているはずの女性が、です。

それから3番目に女性は、自らの生活の環境、条件、そして自らの身体を十分にコントロールすることができ得ていないという状況があります。そこには男女の間の平等な状

況がないということが言えるわけです。この不平等な状況を十分に考慮に入れたかたちでの開発モデルが、いままでできあがっておりません。ある人口グループに対して開発の効果が生まれれば、それが別の人口グループにも波及効果をもたらすということは言えるわけですが、それぞれのグループの出発点がどの点にあったのかによって、開発努力の成果が違ってきます。女性というグループは脆弱性を持ったグループでありまして、ほかのグループと比べて弱い立場にあるわけです。家父長制に基づいた、どちらかと言うと男性の支配、女性は従属をするというかたちの社会的な枠組みのなかで、女性はより弱い立場にあります。したがって、その出発点がより弱い位置にいる女性にとっての開発の効果は少ないということであったわけです。

それから4番目の開発戦略に関して間違っていたと思われる点は、女性と開発と文化、その関わりを十分に考慮に入れたかたちでの開発を行ってこなかったということです。まずはドナー国と開発援助のあり方について話し合いをする交渉担当者は、往々にして男性です。ですから女性がなにを望み、女性の持っているニーズ、価値観、望みを十分に理解したうえでの交渉が、その男性にはできないという状況がありました。また文化的な側面を理由に、女性が人間として持つべき人権を無視されている事実があります。あるいは抑圧されているということのカムフラージュにされてしまっていることがあります。

最近わが国で、開発援助に関する文書を出しましたが、そこに書いてあることを引用させていただきますと、女性を抑圧する文化的な要素がある時に、それには目を向けないで過ごしてしまうことは、社会的な不平等という状況を恒常的に続けてしまうことを意味します。それを支持してしまうことになるのだということです。西側諸国のドナー国がある程度自らの国々における女性のあるべき姿を考慮に入れながら、開発モデルを受益国に提供しますけれども、当該受益国には同じような女性の立場や役割が必ずあるとは限りません。また習慣の違いがある可能性もあります。そういったことにも目を向ける必要があると思います。

わが国の新しい大臣も言っておりますけれども、女性が開発からの恩恵を受けることができないのであれば、開発はなんらの意味も持たないものになるのです。貧困、不平等、そして社会的な階級や性別などによる差別の対象とならないよう努力をすべきです。

オランダでは、「開発と女性」に関する政策の中に次の4つの基準を設定しています。まず第1には、女性の経済的な立場をよくする。収入を得るために生産作業をする。そして2番目に政治的にも独立、自立することが必要である。3番目には、社会、文化的な自主性を与える。そして最後に女性の体に関して、性と子供を生む、育てる、そういった女性としての生活に関して、女性が自分自身で物事を決められるような状況ができる

ようにすること。それが女性が開発から恩恵を受けるということです。

私どもはWIDの政策に基づいて、5つの具体的な措置をとっております。まず第一の措置は、WIDを優先項目として、開発援助プログラムのなかに積極的に組み込んでいく。WIDにトッププライオリティを与える。そしてプログラム全体のなかでまずは女性と開発の問題を取り上げていくということです。二国間援助、多国間援助、それから協調融資、調査活動、その他あらゆる活動のプログラムのなかに、WIDに関わる基準を設定していくことです。これがWIDの主流、メインストリームと私どもが呼んでいるところの措置です。それからWID特別プログラムを設定して、特定のWID活動を実施するということではなく、いろいろな政策のモニターをして、対象となる政策のなかにWIDの政策が入っているかどうかをモニターする。それが第1です。

第2の措置は、特定のWIDの目標設定をすることです。わが国の政府はいまや単純にディレクティブを出したり、ガイドラインを出したりするだけでは不十分な時期になっていると認識しています。いまや明確な目標を設定し、その目標のためにとるべきアプローチ、プロセスをはっきりと設定すべきであると言っています。OECD、DACの設定している基準を参考に致しております。この基準に関しては、OECD、DACのWIDビューロー議長の方からも説明していただけると思います。

1998年には、オランダのプログラムの支出の50％が、少なくとも女性と開発関連に向けられるという計画を立てております。灌漑、農業といったセクターも女性が大いに重要な役割を演じるセクターです。ですからいろいろなセクターでこういった女性に関わるプログラムを支援していくということです。98年には50％というターゲットですけれども、これをぜひとも達成していきたいと考えています。今後4年間、92年から95年までのプログラムのなかに、WIDに関わる措置を組み入れていくということです。

次に、女性のおかれている立場、地位の悪化につながるようなことはいっさいしない。それにつながる支出はいっさいしないということです。WIDの観点から、すべてのプログラムに関して、そのプログラムが女性の地位の低下につながらないかどうかをチェックしていきます。それからもっと積極的なアプローチとしては、女性の自立、自主性を確立するためのプログラムを実施していくということです。

次の措置は、いま述べました目標を達成するために、的確な予算の配分、そしてプロジェクトの実施の円滑化を、行政面からもバックアップしていくということです。こういったことは評価をし、モニターをし、システムそのものをよくしていくということにつながるわけです。現在、これをさらに改善するためのチェックリストを持っておりますし、ウィメン・インパクト・アセスメント・シナリオも持っております。これは開発が女性の置かれている状況にどのようなインパクトを与えるかということを評価してい

くものです。92年の1月1日からは、女性の地位の悪化につながるようなプロジェクトに対してオランダは援助しなくなります。もしプロジェクトの提案があり、その提案が仮に女性の地位の悪化につながるような可能性があると判断されるならば、そのプロジェクトは実施されません。いろいろな措置を機能させるためには、行政側でも開発と女性に関する専門家、また専門知識を蓄積する必要があります。そして上級、中級のスタッフの質を改善する必要があります。

またWIDのスペシャリストの数も行政部内で増やしていきたいと考えております。女性の持つニーズ、女性が置かれているいろいろな制約を把握し、それに対応できるためには、スペシャリストの数を増やすことが必要です。国のなかでも、また複数の国際機関や、あるいは複数の国々の集まりによって、女性の役割が少なくなるような意思決定が行われる可能性につねにさらされているわけですが、そういった危険から女性を守るための努力を続けていきたいと思っております。

オランダには女性開発基金がありますけれども、これは女性と開発に関わるプログラムを実質的に機能させるために役立っています。また新しいアプローチ、それから新しい試みも積極的に取り入れていきたいと考えております。

以上述べましたような措置を、私ども、今後とるべき措置として、最近設定したわけです。WIDが1990年代における開発政策の十分な一部分として組み込まれていくということです。ご清聴ありがとうございました。

司会：　3番目のスピーカーですが、オーストラリア国際開発庁のアン・ジョンストンさんです。アン・ジョンストンさんはオーストラリア国際開発庁、AIDABの太平洋チーム、WID・保健・人口アドバイザーです。それではジョンストンさん、よろしくお願い致します。

---

(3)フィージビリティ調査やプロジェクト・デザインへのジェンダー分析の活用－オーストラリアの経験－

【資料1参照】

アン・ジョンストン

ご紹介ありがとうございます。日本にまいりまして、オーストラリアの経験を皆さま

方と分かち合うことができることを非常にうれしく思います。私どもの二国間の開発プロジェクトでどういうことをしているかを申し上げたいと思います。

まず最初に、政策としてオーストラリア国際開発庁の指針はどんなものであるかということ。そして次にどういうプロセスで私どもは女性問題をフィジビリティ・スタディで扱っているかについて、お話ししたいと思います。そしてそれがプロジェクトデザインにどういう影響を与えるかについてお話ししたいと思います。そして最終的には、プロジェクトの例をお話しします。そのなかでどのようにして女性問題を分析し、設計段階においてそれをどのようなかたちで組み込むかということをお話しし、10年間のモニタリングの結果、どういうものになったかということについてお話ししたいと思います。

10年というのは、長いようでもあり短いようでもあるわけですけれども、実際に女性問題に関しての動きがどういう方向をとったかを見る時には、必ずしも長いとは言えません。オーストラリアの開発政策のなかにおける女性問題の扱い方は、まずオーストラリアの開発庁のプログラムの実施の効果を高めるために行われるものでありまして、女性の問題を男性の問題と同様に優先的に扱って、事実として実際に計画実施評価の段階において、女性問題が男性問題と同様に扱われたかどうかということを検討するものです。

そしてまたオーストラリアの開発援助計画においては、女性も男性も、中心的に、積極的に参加することが非常に大事であると考えています。これは企画の段階、および実施の段階において考慮されています。そしてまたさらに、女性の活動の生産性を高めることが1つの目標になっております。また男性、女性、子供たちに対し、均等に開発援助の利益が分かち与えられることを促進することを目標と致しております。

まず女性問題の分析をどういう枠組みのなかでやるかということですが、男性と女性との役割の違いが出てくるわけです。この女性問題分析の枠組みは、社会経済的なデータを評価、組織するメカニズムでありまして、開発の活動においてどういうふうな人口集団がターゲットになるかということを検討するものです。セクター間の関係、そして男女間の関係をそのなかにおいて検討していくわけですけれども、この枠組みのなかで5つのフレームワーク、5つの項目が設定されるわけです。

1つは活動のプロフィールです。男性と女性の仕事の違いを比較検討するわけです。例えば、農業部門を対象として検討する場合には、まず最初に作付けをするのはだれか。収穫をするのはだれか。あるいは種の収集はだれがするのか。そういう分析を致します。

それからもう1つは、アクセスとコントロールのプロフィールです。女性がどれだけいろいろな分野に進出できるかどうかということです。例えば、土地、融資、信用、教

育、訓練、設備、そういうものについてどれだけのアクセスがあるかということです。どれだけそういうものに対して開放されているかということが検討対象になります。

それから文化的な要素の検討が行われます。活動プロフィールのなかで検討した活動における影響を見るわけです。それからプロジェクトデザインにとってどういう意味を持つかということについての分析も同時に行います。例えば、プロジェクトデザインにどんな意味があるか、どんな影響が出てくるかということを分析するのは、非常に時間がかかる問題です。この女性問題分析をする際に、最良のプロジェクトデザインはどういうものであるかということを検討するのは時間がかかるものです。

そして最終的には、プロジェクトサイクルの評価のシステムを構築します。例えば、中期評価とか、中間評価は非常に大事です。中間的な評価を行いまして、そのプロジェクトの中間点において、最終的な段階に持っていくまでの再評価を行い、再調整が行われます。

また統計的なデータの収集も非常に大事です。どんなニーズが女性にあるか。どんな問題を取り上げていけばいいか。例えば、年齢によって、階級によって、あるいは民族によってどのような問題があるかということを、女性問題として取り上げていくわけです。皆さまのお手もとに私の資料があると思います。様々な種類の活動が出ておりますけれども、この活動プロフィールのなかのいろいろな活動の分類に関しましては、飛ばしていきたいと思います。読んでいただければどんなものかわかると思いますので飛ばします。ここでは、データを収集する際のいろいろな方法や問題についてお話ししたいと思います。まず二次的なデータを収集しまして、例えば、前に行われたいろいろなケーススタディとか論文などを検討する方法があります。それからもう1つは、いくつかの世帯に限った世帯調査をデータのベースとすることがあります。例えば、ラピッド・ルーラル・アプレイザル（Rapid Rural Appraisal）という農村調査が行われておりますけれども、これも非常に効果的な評価の方法です。

それからいくつかの主要な人たちを取り上げまして、インタビューを行う方法があります。例えば、グラス・ルーツのリーダーを対象としたもの。あるいはコミュニティ、地域社会における開発担当者、あるいは村落の保健衛生担当者というような人たちにインタビューをする方法でデータを収集することがあります。

また対象となる地域においての女性問題分析がありましたならば、それも参考となります。例えば、サセックス大学でブリーフィング・サービスが行われておりますけれども、そこで過去の女性問題の分析が提供されるわけです。例えば、インドネシアの水関連の問題に関して、女性問題に関する分析が行われているかどうかということを知りたい時には、そこでの資料収集ができるわけです。そしていろいろな情報を収集して、そ

れを調整、統合し、アクセスを可能にしようというのが私どもの目的とするところです。また各国の女性局がありますけれども、そういうところが1つの重要なデータを提供するベースになります。

また方法論に関しては、例えば、フィールド・トライアルも大事になってきます。それが非常に大きなプロジェクトであったならば、十分な情報を収集することができるわけですけれども、その過程において、女性問題も分析することができます。また文化的な差異があるので、ジェンダー分析をする時には、いくつかの文化が混在している地域であったならば、それぞれを対象として検討しなければならないということになります。もちろんその過程においては、だれを対象としてインタビューをし、情報を抽出するかということが1つの問題点になってきます。

またもう1つ検討しなければならない事項としては、情報提供してくれる人たちを中心にいろいろと協議し、女性と男性の役割が社会的、経済的にどうなっているかを分析することが必要です。そして文化的な地域、あるいは社会的、経済的、法的な制約はどんなものであるかということもひとつひとつ検討していく必要があるわけです。そして女性と男性に対して、どういう職務が男性の役割として課せられているか、女性の役割として課せられているかということを検討することが大事です。もちろんラピッド・ルーラル・アプレイザル・アプローチがその際に非常に有効になってくるわけで、それを無視することはできないわけです。

それからもう1つの検討として、インタビューをする際に、インタビューをする人や通訳の人たちを慎重に選ぶことが大事です。同じ性別の人を選び、同じような文化的な背景を持っている人たちを選ぶことが、インタビューを行う時には大事になってきます。

また開発における女性の役割を1つの問題意識として持っている人たちを、この検討のチームのなかに入れておくことが非常に大事です。もちろんこのためには、一種の訓練プロセスも必要なわけで、実際に協議の過程において働いてくれる参加者に対して、センシティビティ・トレーニング（意識化訓練）をし、この問題についての意識を持ってもらうようにすることも非常に大事です。

それ女性と環境の問題があった場合には、その女性と環境の相互作用はどんなものであるかということを考えていくことが非常に大事であるわけですが、開発途上国において環境における女性の役割はどんなものであるかということを分析せずに放っておくことはできないわけです。

さらにどこで活動が行われているかということを明らかにすることやまた季節の問題も大事です。ある活動がどれくらいの日数をかけて行われるものかということを検討することも大事です。またすでに十分にいろいろな活動が行われている場合には、さらに

負担を多くするような活動を付加することはできないわけですから、そういう意味において時間と仕事の負担がどのくらいであるかということを検討することも1つの活動分析においては大事になってきます。

実際にプロジェクトを設計する際には、プラスとマイナスの面を両方見ていかなければならないわけですけれども、コントロールおよびアクセスプロフィールを作る際には、どういうかたちで女性に対していろいろな資源や便益が流れていくかということを見ていかなければなりません。例えば、土地所有の問題を検討する時に、農業分野においてはどうなっているかを検討することは非常に大事です。どういう役割が期待され、例えば、どういうものが女性の手に入るか。設備、機器など、どんなものが入ってくるかということを分析することが大事です。

ある普及活動に従事している人に聞いてみましたら、新しい分野を開拓していく時には、交通手段の問題のために女性はなかなか参加できないという問題があることが指摘されていました。そういうことを分析していくことが大事です。いろいろな道具、仕事のための設備に対するアクセスと、それに対するコントロールはどうなっているかということを分析するのも1つの活動になっているわけです。

またどういう資源とどのような便益が、資源、装備、あるいは設備を利用することによって得られるかということを分析していくことも大事です。ある地域におけるプロジェクトを分析する際に、制約条件はどんなものだろうかということを分析することも必要です。そしてその制約条件をできるだけマイナスのものからプラスに変えていく方法を検討していくことが必要です。

それから事例の話に入る前に、モニタリングの話をちょっとしておきたいと思います。いくつかの主な指標を使って、そのプロジェクトにおいて女性が平等な扱いを受けているかどうかを見ていくわけですけれども、その1つの指標として、例えば所得が向上したかどうか。あるいは仕事の負荷率はどうだったかということも検討します。また、女性が男性の活動に参加するようになったか。反対に男性が女性の活動に参加するようになったかということも、評価の方法として使われる分析の道具でもあります。

それから、健康上の問題はどうなったか。あるいは乳児の死亡率を見たり、幼児死亡率を見たりします。あるいは信用に対するアクセスはどんなものであるか。トレーニングや普及活動についてのアクセスは女性に与えられているかどうかということも、1つの指標になります。また土地や水、あるいは家畜に対するアクセスはどうなっているかということも、1つの指標です。また設備に対するアクセスがあるかどうかということも1つの問題になります。それからまた、技術に対するアクセスが得られているかどうかということも大事な指標です。女性と男性の役割、あるいは女性と男性の関係が変わ

ってきているかどうかということも1つの指標です。

1つの例として、ネパールの林業関係のプロジェクトをご紹介したいと思います。これは日本も関心のある分野でありますし、またオーストラリアとしては4回も再調整したプロジェクトですので、1つの例としてお話ししたいと思います。ネパール・オーストラリア森林プロジェクトというものがありますが、そのプロジェクトでは女性の問題も検討するようになってきております。林業分野の政府関係者や地域の人々とともにプロジェクト・スタッフが、地域の参加を募ることによって、その保全と持続的な成長を可能にするようなプロジェクトを編み出すことに成功しつつあるわけです。

どういうかたちでコミュニティの参加を募るかということですけれども、まず最初に森林管理の計画を練る時の参加、あるいは森林を守る過程、あるいは種苗を管理、維持する過程での参加、また、植林や燃料の利用を減らしていく際の参加ということも考える項目であるわけです。

また女性の役割を考える時に、例えば、階級の問題、民族の問題、宗教の問題が非常に大事な検討事項になってくるわけです。ネパールでは宗教の問題を無視することはできません。また女性は子供を生み、育て、家を守ることが非常に重要な役割になっているわけですが、そのなかには薪をとってきたり、あるいは動物にえさをやったり、薬草を採ったりすることも含まれており、森林との関わりは深いわけです。

特に男性がインドやネパールの他の地域の方に出稼ぎに出ていくことによって、女性の仕事はますます増えていく。そういう傾向はだんだんと強まってきているようですけれども、そういう場合における女性の役割の増大も検討していかなければなりません。それからネパールにはタガダリと非タガダリの2つの社会的なグループができているわけです。そういう異なるグループにおいて女性の役割にはどういう違いがあるかを分析することも大事です。タガダリのグループにおいては、男性が非常に支配的な、優位な地位を占めているわけですけれども、非タガダリのグループにおいては、女性も積極的な役割を果たし、自分たちの意見も積極的に発表する傾向があります。しかし、最終的な意思決定は男性に任されているわけです。

また、森林を使うユーザーグループのなかに女性が入っているという例もありましたし、女性だけのグループがあったことも報告されています。さらに積極的な女性の参加を得るために、ユーザーグループのメンバーの3分の1は女性でなければならないという公的なガイドラインも策定されました。そして森の問題を解決する際に、ユーザーグループのコミッティーを作って議論させたところ、女性も意思決定をすることができるような非常な能力を持っている人がいることがはっきりしたわけです。

女性はいままでのところ、男性と比べて教育のレベルが低い。それから社会的な偏見

も手伝いまして、十分に均等な機会が教育の面でも与えられないということが明らかになっていました。高等教育機関において勉強するチャンスが与えられても、結婚に影響するということを言われて、なかなかそういうところで教育を受けようとする女性が少なかったということがありました。

特にインスティチュート・オブ・フォレストリーという林業研究所において勉強するチャンスが与えられても、なかなか積極的に参加しないということが、過去には多かったわけです。私どもは、そういう問題を解決するために働きかけまして、現在では先の研究所での奨学金を得て勉強し、林業関係の分野に入った人たちが出てきております。実際25人も私どものプロジェクトのなかで生み出した女性が出てきて、活躍しているわけです。そういうふうにして、女性を1つの産業のなかに導入する際には、経済的な問題のみならず、文化的、社会的ないろいろな問題も同時に解決していくことが大事です。

1つ、技術の問題がありました。チュロのストーブを導入するという問題で、家にいままで使われていた伝統的なストーブに代わって、新しいストーブを導入するプロジェクトができたわけです。いままでのプロジェクトの前のストーブは、燃料を非常にたくさん使ううえ、煙が多い種類のものでありました。燃料の問題と煙の問題を解決するために、新しく開発したストーブを導入するチュロ・ストーブ・プログラムが作られました。その過程において、女性が積極的に参加するようなプロジェクトを作ってきたわけです。

ところが、女性たちは、新しいストーブが導入されても動物のえさ作りのために古いストーブも使い続けたため、煙はなくならず、燃料の必要量は増えてしまいました。そこで見直しが行われ、2つ煙の出ないストーブを導入することがいいのではないかということで、女性の参加を募り、女性に意見を聞いたわけです。

結局、最終的には、新しいのを2つ導入することに成功したわけで、燃料の問題はあまり解決されませんでしたが煙は削減することができました。この導入の過程を見ても、協議がいかに大事であるかということが明らかです。

司会：　どうもありがとうございました。それでは最後に、イギリス海外開発庁、ODAのロザリンド・エイベンさんにお願い致します。エイベンさんは人類学で博士号を取得されまして、現在、WID専門家グループの議長を務めていただいております。それではエイベンさん、よろしくお願い致します。

(4)開発援助のなかのジェンダー

【資料2参照】

ロザリンド・エイベン

ありがとうございます。予定より時間が少し遅れているようです。それで、皆さまからのいろいろなご質問をぜひコーヒー・ブレイクのあとにいただきたいと思いますので、私の話はできるだけ短く押さえたいと思っております。私の話の内容は、皆さまのお手元に届いていると思います。ご参考になさってください。

最初にJICAに対してお礼を申し上げたいと思います。WIDの専門家グループのビューローを代表致しまして、皆さまにお礼を申し上げたいと思います。また今日は開発途上国からも参加者がおいでになっていらっしゃるようで、本当にありがとうございます。また社会文化人類学者の方がいらっしゃいましたら、私から「こんにちは」と申し上げたいと思います。このテーマをJICAとして非常に真剣に取り上げてくださいましたことにつきまして、感謝しております。

イギリスは日本のように、ほかのいくつかの国々と比べまして、より伝統的で、より保守的であるということが言えるかと思います。そういうことで、女性と開発に関してのイギリスのいままでの経験をご紹介させていただきます。日本のご経験と照らし合わせて、参考になるところも多いかと思います。女性と開発というのは、1つのテーマとして、わが国ではオランダやノルウェーなどの国と比べますと、かなり後になってから、遅れをとって取り上げられたわけです。5年、あるいは6年くらい前から、初めて真剣に、女性と開発という問題に取り組み始めた。ただ口先で言うのではなくて、開発援助の際に、WIDのことを真剣に取り扱うことになったわけです。

1986年に、当時の大臣がこの問題を真剣に取り上げまして、ロビー活動を行う人たちに意見を求めてくださいました。私どもの意見が求められたわけで、これは大きな前進だったと思います。イギリスでは、ケイト・ヤング、マクシム・モリナーと言った、皆さんにもおなじみの、世界でも有数のジェンダーに関わる専門家がいます。彼女らの意見が求められ始めたのが1986年、87年くらいからでした。そして首相自ら、私どものロビー・グループに耳を貸すようになったわけです。

それ以降、1988年になりまして、かなり実質的な戦略計画を策定致しました。開発援助のあらゆる部分にジェンダーの問題を組み込んでいこうということが始まったわけです。そして毎年、どういった進歩が見られたかをモニターして、そのモニターの結果を管轄の省に提出する。そしてその報告書とともに戦略の強化のためになにが必要かとい

う提案をしてまいりました。ただ、私どもの管轄の省は複雑な機構になっております。ですからモニターをするに致しましても、コンセンサスによってモニターをする必要がありますので、関係者、いろいろな部局と話し合いをし、交渉し、この報告でいいかどうかという、最終的な行政機関に出す報告書の内容に関しては、あらゆる関係部署との間の話し合いをもとに、妥協も入れ、コンセンサスとして報告書を出してまいりました。

過去5年くらいの間に、そのプロセスもかなり改善されました。ただ一度に大きな進歩があったということではありません。今年は91年ですから、86年の状況と比べてかなりの進歩、前進があったということは言えますけれども、飛躍的な進歩が一夜にして起こるというたぐいの進歩ではありません。一歩一歩着々と、人々が新しい状況に十分に慣れていくのを許すようなかたちで、段階的に進歩がなされてまいりました。

そして、私どもはチェックリストを作っております。これは、DACでWIDに関わる援助実績に関する報告作りの際に使われている基準との兼ね合いで、それを参考にしながら、このようなチェックリストを作っております。DACの加盟諸国、日本も含めます加盟国が、WIDに関わる進歩状況に関する報告書作りの際に参考にすべきクライテリアとして設定されています。これをもとにして作ったわけです。

いわゆるプラクティカルなジェンダーのニーズと、戦略的なジェンダーのニーズを分けて考えております。マクシム・モリナーというイギリスの社会学者、それからカロライン・モーザー氏によって提唱された考え方で、多くのスタッフ訓練計画で実施されている考え方です。プラクティカルなジェンダーニーズと、戦略的なジェンダーニーズとを分けて考えるということです。それによって、徐々に皆さまと、そして皆さまのパートナーであります開発途上国が段階的に前進していくことができるようになるというものです。

プラクティカル、実際的なジェンダーのニーズとはなにかと言いますと、男性、女性の社会における既存の役割に大きな変化をもたらすものではない。ただそれぞれがいま行っている役割を、もっと容易に行えることができるようにする、行いやすい状況を作ってやるということです。男女の役割なり、地位に対して大きな変化を与えたり、インパクトを及ぼすことはないわけです。

それに反して、戦略的なジェンダーのニーズは戦略的に男女の役割を変えていく。それに変化をもたらすということです。通常は女性の地位を向上させることが多いわけです。そして機会の均等という目標、これが戦略的なジェンダーニーズの充足ということになるわけです。開発途上国の当該機関や人々とともに仕事をする際には、まずは社会における女性のプラクティカルな役割が演じやすいように、実際的に出てくる女性側からのニーズを満たすというかたちで開発を進めていくことが、始めやすい方法です。

例えば、女性の仕事の量を減らす。例えば、粉を引く作業、それから水を井戸からくむ代わりに、ポンプを使うなど、女性の仕事を簡単にする。それから女性の健康管理がよくできるようにする。所得、収入を増やす。実際の毎日毎日の女性の生活のなかでの女性の役割、仕事を簡単にするということです。

それと対比的に、戦略的なニーズを満たす仕事は、そのあとですることができます。あるいは並行して、実際的なプラクティカルなニーズを満たすとともに、戦略的なニーズ充足をはかることもできます。例えば、教育の機会、あるいは教育へのアクセスの拡大、そして生産活動へのアクセスの拡大、それから信用供与を受ける可能性、すなわちお金を借りられる環境作りを、女性のために提供する。また、指導者としての能力を身につけるための訓練、公衆の前で女性が恥ずかしがらないで、自分の意見を述べることができるように訓練をする。そして、人前で話すのを躊躇してしまうという状況から女性を解放する。また雇用の機会、仕事を女性に与える。これも戦略的なニーズを充足する開発活動です。

例えば、洋服を作って収入を得ている女性もいます。しかし、収入のない仕事をしている人がいます。インドでは、未熟練工として、女性が未熟練レベルの仕事をすることができるようになっております。その人たちがもっと収入を得ることができるようにするのも1つの方法です。もう1つの方法は、未熟練工としての仕事を通じて、もっと収入を増やす方向ではなくて、その代わりに熟練工になるようにしてやる。それによって、熟練工としての仕事を通じて収入を増やす道を作る。そういう方法もあるわけです。

ですから即必要な水の供給、子供の教育、その他、いろいろな毎日の生活でいま必要とするニーズを満たす。プラクティカルなニーズを満たすことを始め、それによって女性が自信を持つことにより、もっと戦略的なニーズ、いままでのところは女性に与えられていないチャンスをつかむことができるような戦略的な開発をしていくことが可能だと思います。

DACのメンバーとして、私どもはプロジェクトに対して資金的なサポートをする時に、いろいろな質問を自らにしなければならないことになっております。それはどういうことかと言いますと、実際にプロジェクトを実施する時に、注意深く慎重に現状を分析、検討することが必要だということです。オーストラリアの方からの説明にもあったように、技術スペシャリストと行政担当官とともに、検討をし、1つのプロジェクトが的確であるかどうかを判断する必要があります。同時にWIDに関して、女性のニーズを満たす必要があるという、同じような認識を受益国側も持っていなければなりません。

どういった質問を投げかけなければならないかと言いますと、プロジェクトの影響を受ける女性に対して、プロジェクトの内容に関して相談されたかどうかという質問です。

多くの社会では、女性に相談を持ちかけても、女性がなかなか意見を述べられないという社会環境があります。ですから必ずしもこれが簡単にいくとは言えませんし、特に農村地域の女性の場合には難しいと思います。農村地域では、プロジェクトの内容に関して、事前に相談なり話し合いを行う際に、男性しか出てこないという状況もあると思います。ですから女性たちがグループを作って、自分たちの意見をまとめて、プロセスへ参加できなければならないと思います。

次に、プロジェクトの実施において、ただ単にプロジェクトからの恩恵を受けるものとしての女性ではなく、プロジェクトの実施に積極的に参加するために、女性が養成されていることがはっきりとプロジェクトにうたわれているかどうかという質問です。例えば、女性の地位の向上のために、母性保護に関わる病院の建設などが対象になっているプロジェクトがあるとしても、その病院や施設の運営に当たって、女性が関与しているものでなければ、真の意味での女性のためのプロジェクトとはならないわけです。

あるいはプロジェクトのなかに、このプロジェクトの結果、女性の地位が向上する。あるいは女性がこのプロジェクトの結果、恩恵を受けることがうたわれていることが多いのですが、それが必ず実現するためには、具体的にはいったいなにが行われるか。また場合によってはこれこれしかじかの制約があるので、その制約があったのではせっかくの成果が出ないので、その制約を取り除くためにはこれこれしかじかのことをしなければならない。そういったことを明示しているかどうかということです。制約を取り除くことが、やはり成功に不可欠です。

それからジェンダーに関わる専門知識を十分に使っているかということです。またプロジェクト・サイクルの中間時期にも、また状況は刻々と変わっていきますので、プロジェクトの各段階ごとに評価、モニターをしていかなければならないと思います。ですから中間評価が十分に必要となります。予想通りの結果が着々と出てきているかどうかを、プロジェクトの中間時期に見直してみることが必要です。

DACのメンバーとしては、いま述べたような質問を自分自身に投げかけ、それに答えていくことにより、真剣にプロジェクトの分析をはかるわけです。段階的な変化をもたらすことにより、ますます多くのプロジェクトが、プラクティカルなニーズに応えるところから、戦略的なニーズに応えるプロジェクトになっていくよう努力をしている次第です。

司会：　ただいまでいちおう講演の方は終わりまして、このあとコーヒー・ブレイクのあと、質疑応答を進めさせていただきます。

質疑応答

司会： それではただいまから質疑応答のセッションに移りたいと思います。

質問者1： 皆様がこれまでWIDに関連したプロジェクトを実施してこられた際、途上国政府の政策や方針と対立するようなことはありませんでしたでしょうか？

エイベン： 問題となりますのは、1985年に婦人の10年の終わりが来たわけですけれども、その時に国連の加盟国は女性の地位の向上のための戦略に関して、ほとんどが調印したわけです。そして「開発と女性」の分野における援助の原則と致しましては、この戦略に準じた行動をとるということであったわけです。ですからDACの「開発と女性」におけるガイドラインが前向きの戦略を含んでいるわけで、これが将来戦略を練るうえに非常に大事な役割を果たしているわけです。

実際にこのプロジェクトベースの交渉の段階、あるいは対話の段階におきましては、いくつかの問題が取り上げられる場合があります。例えば、女性の問題に対応するためには、その問題にどういうふうにして取り組めばよいか、ということについての見解の違いが出てくることがあります。これは具体的に実施の段階における政策の推進の方法の食い違いということで、全体的な国連の枠組みのなかでの将来戦略に関する各国政府の合意とは違った種類の見解の差異になります。

質問者2： WIDの実施をするに当たりましては婦人問題の理解が大変大切だと思います。ドナー国のなかでナショナル・マシーナリーとどのような連携、あるいは協力をとっていらっしゃるのか。それから一方、援助を受ける側の方でのナショナル・マシーナリーとの連携、協力をどのようにやっていらっしゃるのか。それが第1点。

それから2点目が、そういった国際WIDを実施するに当たって、ナショナル・マシーナリーにどのような役割を期待されているのか。基本論で結構ですけれども、お答えいただければありがたいと思います。

レイテ： この質問については、私の方からお答えさせていただきたいと思います。そしてあとでまた同僚の皆さま方にも付け加えていただきたいと思います。非常に大事な質問です。まず最初にノルウェーの場合です。私は先ほど申し上げておりますけれども、元ノルウェーのナショナル・マシーナリーの長でして、個人的にも私は関わりがあったわけです。私どものナショナル・マシーナリーはどんなことをしているかということについては、認識があるわけですけれども、さらにいまナショナル・マシーナリーの各部門といろいろと協議をしておりました。例えば、機会均等協議会というナショナル・マシーナリーのネットワークとも緊密な連絡をとっておりました。

さらに政府のナショナル・マシーナリーの専門的な分野とも関わりがありました。そしていろいろなところの資金、あるいは人的資源なども含めましての資源を活用することに関わってまいりました。ノルウェーの場合には、女性の法的地位の確立、あるいは法的支援の面での政策的な協調が行われておりまして、私どもの専門能力をそちらの分野に傾けることがありました。私どもの女性運動が非常にプロフェッショナルに展開しまして、女性の法律的権利に関する研究分野に関しても、奨学金が与えられておりまして、専門知識の開発に努力致しております。

またジンバブエの方でも、このような種類の女性の学術的な活動の支援を行っております。そういうかたちでのナショナル・マシーナリー間のリンケージが保たれています。さらに、ナショナル・マシーナリーは女性運動と手を組んでいます。私どもの国のJICAにあたるNORADですけれども、そちらの方では毎年女性の団体と会合を開いておりまして、開発協力に関するいろいろな専門的な知識の交換を行っております。それらの団体の支援を受けると同時に、いろいろな批判も受けるということを致しております。

それからもう1つ、途上国のナショナル・マシーナリーがそれぞれの国においてどういう機能を果たすべきかという点に関しては、それぞれの国の風土に合ったナショナル・マシーナリーに成長するべきだと思います。この15年間、私どもはナショナル・マシーナリーに対して支援してきたわけですけれども、このような支援は実際に国連の75年の会議で出された提言が行われる前から実施していたわけです。

その経験から言いますと、ナショナル・マシーナリーにいろいろな運営上の負担をかけないことが大事なのではないかと感じております。いちばんよく機能するのは、一種の政策推進の面でのモニター的な役割を果たす場合であると思っております。実際にプロジェクトの実施に関して、細かく支持、支援をしていくというよりも、監督していくというかたちでプロジェクトの運営を見守っていくという役割を果たすナショナル・マシーナリーがいちばん効果的だと感じております。

それは一般論で、もちろんいろいろな国において、ナショナル・マシーナリーが別な意味での、実施の面での効果を上げているところもあると思いますが、私どもの経験からいくとそういうことが言えます。

ブランカート： 私からも少し付け加えたいと思います。オランダではWIDのビューローと国内の女性地位向上政策との間に、緊密な連携が保たれています。全般的

な女性の地位向上のための政策、文書作りにも大いに関係しています。また、省間の女性問題に関する審議会があります。各省庁から女性担当の行政官が出る審議会です。また、省間で毎年、意見交換をする話し合いの枠組みがあります。開発協力の省と、女性の地位向上のグループとの話し合いもあります。ほかの省がどういう経験をしているかということから、お互いに大いに学び合うということです。

私どもの国内でも、開発プロジェクトはたくさんあります。ですから国内にある開発のためのプロジェクトからの経験についての情報交換もしているわけです。また全世界のほかの国の女性を組織するグループや団体との連携をはかっています。わが国の女性団体もしっかりとしたものがあります。そういった団体の声を十分に反映させています。さらに、草の根レベルでの女性の声を反映させるかたちでも努力をしています。こういった女性を代表するグループとの対話を開発途上国においても行うことを、わが国は奨励しております。

ペルーでワークショップが開かれましたが、私どものナショナル・マシーナリーとオランダの政治家が、このワークショップに出席致しまして、同時にほかの西側諸国やペルーの女性団体の代表者も出席しました。このワークショップでは、ペルーでどういう進展があるか、またほかの国からなにが学べるかということを話し合ったわけです。オランダにおける女性の地位向上のための努力から、どの点を参考にできるかということを話し合ったわけです。

ノルウェーの私の同僚も言いましたが、ナショナル・マシーナリーのなかには技術プロジェクトを実施し始めているところがあります。こういったナショナル・マシーナリー間のコーディネーション、調整をもっとはかっていくことができると思います。女性の地位の向上のために、わが国で多くのプロジェクトを実施してきています。そしてほかのいろいろな関係省庁が独自に実施するプロジェクトがきちんと行われているかどうかをモニターする役割を、わが国ではナショナル・マシーナリーが果たしているということが言えます。

ナショナル・マシーナリー、また女性の団体こそが、もっとも貧しい環境に置かれている女性の声を一般に知らせることができるわけです。大型の灌漑プロジェクトであるとか、植林のプロジェクトなどの実施に際しまして、女性の声を反映させるためには、やはり女性の組織、団体の役割が大いに期待されるわけです。

質問者3： 質問が2つあります。1つは、「開発と女性」においてNGOが果たす役割は大変大きいと思うのですが、パネリストの皆さまのそれぞれの国で、ご自分の国のNGO、それから開発途上国のNGOに対して、資金協力などでどのくらいの予

算が割り当てられているのでしょうか。それを教えていただきたいと思います。

2つ目の質問は、イギリスのエイベンさんへのものなんですが、今日いただいたハンドアウトのなかで、「Questions for Reporting to the DAC」という質問事項がありました。これは今日のお話ですと、すべてのプロジェクトについて事前にこのような評価をすることが義務づけられているということでしたが、このような評価を事前にするということは、法律上の要請なんでしょうか。あるいは単なるガイドラインでそのような要請がされているということなのでしょうか。また、これは事前に当該途上国の女性と協議をするという、「コンサルテーション」という言葉が入っておりますけれども、ある特定のプロジェクトがその国の女性の地位の向上には必ずしも役に立っていないという否定的な評価が出た場合に、事後的にそれらの国の女性が援助を与えている国の政策決定機関に対して、なんらかの意見を反映する方法があるんでしょうか。それについてお尋ねします。

ジョンストン： 最初の質問にお答えしたいと思います。NGOがドナー国で演じる役割ですけれども、オーストラリアではNGOは非常に大きな役割を演じています。女性の諮問審議会がありまして、規則的にこのようなNGOと話し合いをしております。私どもの活動に関して、NGOがどのような期待をしているか、どういったかたちでお金を使うべきだと彼らが考えているか、という意見を聞いております。それからNGOに対しても、援助をしております。グラントの供与を行っております。昨年はNGOがもっとお金を要請するという状況があったわけです。その理由として、NGOが自信を持って、責任あるかたちで、大きなプロジェクトを管理していくことができる。したがってそのために資金が必要である。資金を出してほしいと言ってきております。

また二国間援助のプロジェクトに関しても、責任を持って管理ができるので、資金がほしいという要請があります。都市地域開発プロジェクト、農村地域開発プロジェクトなど、かなり大型のプロジェクトをNGOが責任を持って行っている。そのために林業に関わる省などが援助を実際にしているということがあります。

ブランカート： NGOについてですが、オランダの場合援助資金予算の10％、すなわち2億1500万ドルがNGOの活動に向けられている援助額です。ただNGOの行う事業が失敗してもらっては困るわけですので、私どもがNGOがなにをしているか、NGOの開発プロジェクトのパートナーとして、どんな人、どのような団体を選んでいるか、ということをNGOの外から緊密にチェックをしながら、開発援助をし

ていくという方法をとっております。

レイテ： 付け加えます。ノルウェーでは開発援助の15ないし20％くらいがNGOに究極的には向けられています。NGOの役割は増大しつつあります。協力のパートナーとして、大きな当事者になってきつつあります。そこでNGOの活動に関しては、政府の開発援助に関してモニターが必要であると同様に、やはりモニターが必要です。開発途上国における、現地にあるNGOも重要な役割を演じます。こういった開発途上国の現地NGOが、積極的に開発プロジェクトに参加することによって、開発途上国における民主主義の確立にも寄与できるわけです。

開発途上国では異なる手段が必要であるということがわかってまいりました。NGOを通じてということでありますと、一連の手続きが必要になってまいります。また開発途上国で正式にNGOと認められるためにも、一連の手続きが必要です。ですから開発途上国の場合には、非公式なかたちで女性の開発問題に使える基金を別途充当するということをしております。女性自身が実施する女性のための活動、これこそがきわめて貴重な活動となり得るわけです。

ですから、通常のNGOに援助を与えることによって、NGOがそれぞれのプロジェクトを実施する、そういうこと以外に、非公式なかたちで女性自らがプロジェクトに関わることができるようにしようということです。

エイベン： まず最初の質問にお答えします。開発援助のかなりの部分、ますます多くの部分がNGOを通じて実施されるようになっております。NGOは必ずしもジェンダーの分析、ジェンダーの問題を理解したうえでいろいろなプロジェクトを実施しているわけではありまでん。そこでイギリスでは、全国婦人組織連盟というような婦人団体の連合体を支援しています。プロジェクトの目標は、この連合団体が力を貸すことによりまして、いろいろなNGOのWID関連活動を強化するということです。

そして同時に、私どもの援助プログラムを大いに支援できるような効果的なロビー団体ともなり得るよう、彼らを支援するということです。私どもがNGOをモニターすると同時に、NGO自らも力をつけて、私どもをモニターすることができるようになるということです。それを目標としています。

2つ目のご質問に対するお答えですけれども、全てのプロジェクトに関してこのチェックリストに答えることは義務付けられていますが、必ずしも「イエス」と答えなければならないというものではありません。プロジェクトの性格、WID、女性を主に対象としたものなのか、あるいは女性の参加を組み込んだプロジェクトであるのか。性格づけをするために、スタートとするための質問であります。

また報告の手続きがあります。WIDを組み込んだプロジェクトをどれほどよく作っていっているかということを判断するための報告書作りに参考にさせるための質問です。

究極的な目標は、プロジェクトのなかでWIDを組み込んだプロジェクトの割合がどんどん多くなっていくということです。そして仮にWIDが組み込まれていないタイプの開発プロジェクトである場合には、なぜ組み込まれていないのかということも明記するということを目的とします。しかるべき時期に、こういった質問の仕方が的確なものであるかどうかを見直します。

仮に女性がプロジェクトの結果、恩恵を受けないにしても、女性が犠牲になってしまうようなことだけは避けたい、そういったことが目的です。例えば、ダムを建設する。女性は必ずしも直接的にその恩恵を受けるのではないかもしれません。しかしダムの建設の結果、いままで住んでいた村落が場所を変えなければならないかもしれません。その場合に、新しい移住先での生活の方が、以前の生活よりもよくなるということを保証することが必要になります。

質問者4： 開発における女性、開発への女性の参加という場合に、どのような開発に参加するかということが大変大事だと思います。なぜならば、例えば、タイで日本が開発に大変協力しているわけです。企業の進出だとか、巨額のODAを出したりして……。ところがタイの日本的な開発のために、農村が貧困化して、たくさんのタイの女性が日本に人身売買で来るという状況が起こっています。私の質問は、女性にとって望ましい開発はいったいどういうものであると皆さんが検討していらっしゃるのか、どうかということです。それがいちばん知りたい点です。

それからそのような開発のために、日本のODAが使われて、アジアの女性にいろいろなネガティブなインパクトがあるということを聞いていますけれども、日本のODAのあり方について、なにかコメントがあったらお願い致します。

ブランカート： もちろん私どもすべてがいい開発活動を女性のために求めているわけです。そして、もちろんそれぞれの国はできるだけのことをしているわけです。私は日本の開発支援活動はどんなものであるべきかということを言う立場にあるものではありませんけれども、私どもとしてはその国でも最善を尽くそうとしているわけです。

私も導入の部分で申し上げましたけれども、過去においては開発活動が女性の立場を逆に悪くしてしまったこともあったわけです。そういうことで、私どもはつねに心を新たにして、どういうかたちで私どもの開発援助活動がさらに改善されるかということを考えて、女性に対してマイナスの効果が出ないような開発支

援はどういうものであるかを検討しているわけです。

例えば、女性の自治のことを考えましても、実際に物理的、政治的、イデオロギー的な枠組みを考えていかなければ、ミスが起こる可能性があります。そういうことで私どもは枠組みを広げて、広い検討が必要であるということを認識しているわけです。1992年の1月以降、私どもは4つの分野に関して女性の開発への関わりにおいてのネガティブなインパクトはどんなものがあったかを評価しようとしているわけです。私どもとして、まだ評価の検討が十分に行われてないわけですので、そういう検討が必要であると思っています。

例えば、非常に大きな港湾の整備計画は、必ずしも直接女性に関係のない問題のように見られるわけですけれども、そういうプロジェクトの結果、女性に対してネガティブな影響が出てくるということがあるならば、それは分析、検討しなければならないと思っております。例えば、女性の労働者がそのような港湾事業に投入されるということがあって、しかもそれがネガティブな意味合いを持つような仕事であった場合には、それはやめさせなければならないわけですから、そういう意味においての評価活動が必要であると考えております。

もちろん、いろいろな商業活動が、援助の過程には加わってくるわけで、そういう様々な活動のなかで、どういうネガティブな影響が出てくるかを分析するのは、非常に困難な事業ではあります。しかし、よりプラスの効果を多くもたらすためにはどういう姿勢で開発援助を推進していくべきなのであるか、ということを検討しようとしているわけです。

あるいは、マイナスでもプラスでもないという場合には、そういうものをいい方に向けるためには、どのような開発援助活動をするべきであるか、ということを検討することが大事だと思います。例えば、インフラ整備のプロジェクトなどにおいて、大量の資金が援助として入ってくる場合、マクロ経済的には非常にいい影響があると致しましても、直接女性の日常生活には影響が出ないという場合には、女性に大きな恩恵をもたらすようなプロジェクトも導入することが大事であるということを認識し、そちらの方に資金を向けることもしなければならないわけです。具体例として教育プロジェクトなどが入ってくるわけです。

いろいろな国別に、どういうプロジェクトが女性にとってもっともいいものであるか、あるいは要求されているものであるかを識別し、それぞれの関係諸国との対話を通じて、そういうプロジェクトを導入する可能性を追求することが必要です。また、グラントの問題の関係でも、無償資金援助であるか、あるいはひも付きローンであるか、いろいろな種類のものがありますので、そういうものをいち

いち見ていくことも必要ですけれども、場合によっては非常に政治的な問題に関わることにもなりかねません。

レイテ： これに関して、私も一言申し上げたいと思います。大事なことはプロジェクト中心に物事を考えていくということだけではなくて、もちろんマクロのレベルでのプロジェクトを見ることは非常に大事ですけれども、いろいろな面から見ていくことが大事です。

日本は国際機関を通じまして、非常に多くの開発資金を送っています。日本の開発援助資金が、例えば、世銀との協調融資に使われていることもあるわけです。そういうなかにおいて、日本が開発援助を考える際に、多国間機関とも連携を保ち、女性問題に関してもきちんとそれが促進されるようなプロジェクトに目を向けていくように開発援助計画を方向づけることも大事だと思います。

いまの質問は、非常に微妙な点にも触れているわけです。例えば、タイの問題がありまして、それがネガティブなインパクトがあるからということで、タイの政府の開発援助政策を変えさせるべきかどうか、ということが問題になってくるわけですけれども、それは非常に難しい問題です。つまり、それぞれの国の方向があるわけですし、また女性の自立を獲得するような問題ということも大事で、女性が政治的にも経済的にも力を獲得するということも非常に大事であるわけです。それによって、国のなかから女性が自分の地位を向上させるための努力をしていくことを支援することも、非常に大事だと思います。

ジョンストン： もう1つ、ネガティブインパクトに関しての質問についてのお話をしたいと思います。あるプロジェクトの直接的な影響がどんなものであるか、ということを評価するのは非常に難しいわけです。女性問題に関しまして、直接的な影響はどんなものであるかを評価するのは比較的やさしいわけですけれども、間接的な影響がいろいろと出てきて、女性の生活に影響が出てきたということについて、事前に評価することは非常に難しいわけです。

例えば、女性の仕事が増えた結果、家庭内の仕事をするため、子供が学校に行けなくなるということも、やはり間接的な影響なのだと思いますが、その間接的な影響評価は非常に難しいわけです。そういうことを考えますと、必ずしもいろいろな問題は先端技術の導入や、ハイテク的な解決策だけに頼ることはできないのではないかと思います。

例えば、タイの北部に脱穀機を入れることによって、女性の仕事がなくなって、都市部に女子が流れてきて、そこで別の仕事に従事してしまう。あるいは売春関係の仕事に入ってしまうことがあった場合には、どういうふうにすればそういう

問題を解決できるかということも考える必要があるかもしれません。

あるいは、エイズの拡大をどういうふうにして止めることができるか、ということも問題になってきます。例えば、移民労働があった場合には、それがどういうかたちでネガティブインパクトを及ぼすかということについても分析する必要があると思います。

質問者5： WIDを進めていくうえで、やはり男性の理解と協力が非常に重要になってくると思うのです。皆さま方の国で実施されたプロジェクトなりプログラムのなかで、男性の理解をうまく得て成功した例があるでしょうか。もしありましたら、その時、どういう方法で男性の理解と協力を得られたのかという点をお答えいただければと思います。

エイベン： 非常におもしろい質問でした。この午後、開発の枠組みにおける女性の役割についての話であったわけですけれども、私どもは女性問題をジェンダーというかたちで表現しています。社会において、女性と男性との関わりはまったく切り離すことができないものです。過去、開発問題において、女性の活動が成功しなかったのは、女性の問題を1つの真空状態のなかで検討しようとしたからです。実際に女性と男性の関係を理解し、その関係が国によってどういうふうに変わっていくか、違っていくか。あるいは、また国によっても時間の経過とともにどういうふうに変わっていくかを分析し、それを理解することが大事であるわけです。

例えば、イギリスの私どものスタッフに対する教育訓練計画のなかで、戦略的なジェンダー・ニーズはどんなものであるかを検討する時に、男性の戦略的な要求はどんなものであるかということを尋ねることがよくあるのですが、そういう際に、戦略的な男性のニーズは、家族ともっと時間を過ごすことが大事なのではないかと言われるわけです。朝早く仕事に就いて、夜遅く帰ってきて、土曜日も出かけて働いて、休暇はろくにとらないという男性の場合には、もっと家族と過ごす時間を大事にするということが、戦略的な必要、あるいは要求になってくるわけです。

そういうことで、男性の課題はなんであるか。女性の課題はなんであるかということをテーマとして取り上げていくわけですが、ゼロサムゲームとは違いまして、女性になにかを与えれば、男性からなにかをとることになるということではないわけです。男女がどういうふうにして共存していけば、お互いの生活をお互いに満たすことができるかを考えるのが、非常に大事なジェンダーの分析になると思います。そのようなアプローチを私どもはとっております。

開発途上国とのいろいろな仕事におきまして、私の感じますのは、自分の国で

理解してもらうよりも容易に理解してもらえることが多いということです。多くの状況において、多くの国において、男性は女性の問題を理解するわけで、そしてなんとか状況を改善していこうという考えを持っている人たちも多いわけです。そういう人たちの協力を得ることは十分にできるものだと思います。

レイテ： ノルウェーの女性の地位向上のためのいままでの活動に照らし合わせて申し上げます。ノルウェーの女性は非常に急速にいろいろな新しい地位を獲得してきたわけです。1970年代に、また80年代の半ばくらいまでには、女性の側に進歩があった。しかし同時に、気がつかないうちに、男性の役割、男性の方も変化してきていたわけです。そこで政府部内に1つの委員会が設置されまして、男女双方の検討により、男性の社会における役割を見直す、再評価をするという作業をすることがありました。

つまり、女性の進歩があったと同時に、これは1970年代ですけれども、男性の方にも変化がありました。したがって、男性がどういうことを要求しているか、男性側からの要求に目を向ける必要性が、同時にあったわけです。

男性の役割を検討する時には、いわゆる女性が伝統的に就いている職業に男性も少なくとも何割くらいは就くべきである等々、数字で枠を作る動きがしばしばあります。例えば、幼稚園の保父の数も男性の数を何パーセントにしなければならない。あるいは看護婦にしても、男性の看護士の数をこれくらいまで上げなければならないという意見が出てくることがあるんです。そして伝統的に女性がもともと就いている職業で、管理職にどんどん男性が入ってくることが起こります。

それは男性の方が必ずしも有能だからという理由ではなくて、女性があまりにも長いあいだ男性の下で働くことに慣れているからという理由で、そういう状況が起こったことがあります。ですから、何割を目標として増やすべきだ、というアプローチは気をつけなければならないアプローチだと思います。

質問者5： 具体的な途上国援助のプログラムのなかで、そういう成功例はありますでしょうか。一般論として申し上げるのは非常に難しいかもしれませんけれども、やはり先進国に比べて、途上国の場合、わりあい男性社会といいますか、男性の力が非常に強いということで、先ほどのお話のなかでデシジョン・メーキングのなかに女性の参加を促進したというお話もありました。その時にどういう方法をとられたか。そういう例がありましたら……。

ブランカート： 開発途上国では、男性支配かとおっしゃったと思うんですが、まったく反対のケースもたくさんあります。私どもが考えているイデオロギー、そして男女の役割の分担をそのまま押しつけることがよくないわけです。ですから、プロ

ジェクトに関しまして、受益国側の方が女性の進出は進んでいます。すなわち、プロジェクトに関する協議、交渉を行う際に、交渉のテーブルについている人を見ますと、開発途上国側の方が女性のメンバーが多いというケースもあるんです。

ですから男性にせよ、女性にせよ、貧困に苦しんでいる人たちの声を十分に反映する代表者を前に、その人と一緒に話をしていくことが必要だと思います。つまり、男女どちらにせよ、開発途上国側の話し相手が、当該国の援助や開発をもっとも必要とする人たちの声を代表するということです。草の根レベルでの調査でわかったことは、男女の区別をまったく無視して開発をすると、開発の波及効果が広く社会にもたらされないという結果です。というのは、開発途上国においてはやはり男女による役割の分担がある程度行われています。その草の根レベルで、どういうかたちで役割の分担が男女で行われているか、ということを無視して開発を進めていくことは、その効果を少なくすることになってしまうということです。

またターゲットグループを明確化することができない場合も、プロジェクトはやはり成功しません。人種であるとか、あるいは社会の階層、階級、どの階層の人たちをターゲットとしているかがはっきりしていないプロジェクトは成功しません。

レイテ： しばしばインフォーマルなかたちでは意思決定者は女性です。プロジェクトで指導者の訓練をする、あるいは公衆の前で意見を発表するような訓練は、非公式なかたちでの意思決定者を助けることになります。

それから地域社会の森林のユーザーの30％が女性であることがわかっている国もあります。ですから、どういう開発の段階にあるかによって状況は違っていると思います。

エイベン： インドで農業普及プロジェクトを実施した際、外部の機関に調査を委託しました。その結果わかったことは、女性が財布のひもを握っているということでした。農業の生産性向上のために、どの種子をどのようなかたちで効率的に使うとよいのか、肥料をどのように効率的に使うといいのか、ということを男性にだけ教えようとした。しかし、農家で実際に財布のひもを握っているのは女性です。したがって、このプロジェクトは効果を奏しないということがわかり、肥料の効率的な使い方はこうであるということを教える相手は女性にしなければならないということがわかって、プロジェクトの実施の仕方を変えたことがあります。

いまでは女性の農業従事者を対象に、彼女たちとの話により多くの時間を費やすようになりました。それでもプロジェクトのシニアマネージャーは、こういう

状況を見てまだかなり驚いた状況でして、私どもも実際に女性の農業従事者を訪問した時、3人の男性と私とで農村に行ったんですけれども、プロジェクト・マネージャーが私に言いました。「あなたは女性の代表の人と話し合ってください。私ども男性軍は本当の農業従事者と話をしてきますから。」

私は、むしろ逆であるべきだ、女性に男性の農業従事者に話をさせるべきである、と言ったわけです。マネージャーはそれでもびっくりしていましたけれども、だれを相手に話をするかによって、プロジェクトの効果の出方が違ってくるといえると思います。

質問者6： コミュニティー・デベロップメントの例をとって、インタンジブルな効果についての評価の仕方について、お答えください。

ジョンストン： コミュニティー開発の無形の効果をどうやって評価するかということですけれども、これは非常に難しいことです。もともと最初の分析の過程において、あるいは最初の社会評価の過程において、どういうものが具体的な指標であるかを把握しなければいけないわけですが、これは文化によって違いがあるわけです。例えば、モニターする時に、現金所得の増大とか、あるいは女性の場合には意思決定の機会の増大とか、委員会のメンバーになる機会とか、あるいは教育、訓練の機会に対するアクセスの増大というものを見るわけです。そしてどういう種類のものに女性を解放すべきであるかという視点に立って項目を設け、それについての効果を評価していくわけです。

しかし、間接的な影響もいろいろありまして、予測できないものもあるわけです。そこで時間を経るにつれまして、新しい指標も導入していかなければならないということになります。そこで、中間評価、あるいは経時的な評価が必要になってくるのです。これは現場で働く人たちの重要な役割となります。皆さま方の機関のなかで、現場に身をささげている人たちの方が、実際に事務所で評価をしようとする人よりも情報をたくさん持っているわけですから、そういう人との接触も大事になります

質問者7： 最初の質問はレイテさんに向けた質問です。ノルウェーの場合ですけれども、いままでのところ、パフォーマンス・アプレイザル・レポート（業績評価報告）を出すことを要求したことがありますでしょうか。例えば、ジェンダーの問題に関しまして、各プロジェクト別にある職員がどれだけ貢献したかということを評価することがありますでしょうか。

それからブランカートさんにお伺いしたいのは、オランダ政府はいままでどの程度スタッフの教育、訓練の段階において、ジェンダーの問題を取り入れること

に成功してきたでしょうか。前にインドネシアのオランダ大使館にまいりました時に、WIDの素晴らしい職員がいたのですけれども、その方が退任されたあとはうまくいってないような気も致しますので、伺いたいと思います。

それからジョンストンさんに伺いたいと思うんですけれども、研修に50％の女性枠を設けるということがどの程度うまくいっているかどうか伺いたいと思います。

それからエイベンさんに対する質問ですけれども、どうしてODAの枠組みのなかで、女性問題への取り組みがいままで足りなかったんでしょうか。特にアフリカの問題などに関しましては、文化人類学的には女性は非常に大きな役割を果たしてきたわけですけれども、イギリスの援助には、どうしていままでそれほどうまく取り入れられなかったんでしょうか。

レイテ： 最初の質問にお答えしたいと思います。まずノルウェーは、この行政機構のなかで、USAIDのような評価システムを導入致しておりません。それぞれの職員に対しての個人的な記録をとっているわけですけれども、このジェンダー・メソドロジー・コースに参加したかどうかに関しても記録しています。マネージメント・レベルで参加してないのはたった一人だけという状況です。ですから、次のコースには彼は必ず呼ばれるのではないかと思います。そういうかたちで、グループからの圧力がかかりまして、だれでも参加を要請された人は参加しなければならないということになっています。

職員がだいたいみんな、ジェンダー・トレーニング・コースを受けますと、次の段階に移れるのではないかと思います。将来的には積極的に参加してくれるような体制作りに向かうのではないかと思っています。

ブランカート： ではもう1つの質問ですけれども、研修の問題と、それから女性の開発専門家の問題です。もちろん組織のなかに女性と開発問題を専門的に扱うことができる人を養成することは大事です。しかし、もちろんほかの開発問題を大きな枠組みのなかで扱うことができるような人間も必要です。先の私の話の中でも申し上げておりますけれども、大使館内の「開発と女性」の専門家はだんだんと増えているわけで、これは非常に素晴らしいことだと思います。大使館のレベルでそういう人が増えることは、現場に近くなることでありますし、そういう人たちが現場の人たちとの直接のコンタクトをとることができるので、そういう意味において非常に大事だと思います。

私どもの援助対象国におきましては、WIDの専門家を大使館に配属しています。先ほど言っていらしたインドネシアの例では、インドネシアで3年半近く働

いた経験をもつ人が後任になったときいています。どういう人たちをそれぞれの大使館のレベルで持っておくかということは、大きな問題であるわけです。どのくらいの職責を与え、またどのような職位を与えるかということも1つの問題です。

教育、訓練、養成の問題に関しては、いくつかのプログラムがありまして、私どものスタッフに対しては、それを受けることを義務化しているわけです。そのテーマの1つとして、女性と開発援助の問題が取り上げられることになっています。また、セミナーを通じて、「開発と女性」の問題を検討する機会が与えられます。それを通じて、専門家の養成が行われます。

ジョンストン： 先ほどの私どもの50％のクォータに関しての問題ですけれども、もちろん私どもも状況によりましては、それだけの女性を十分に確保することができないということもあります。また、必要な男性も得られないということもあるわけです。そういう場合には、どういうことが障害となっているかを検討するように致しております。参加を妨げる要素はなんであるかを検討してきた結果、いくつか理由が挙げられるわけです。

例えば、メディカル・ビザが得られないということで、医療検査を受けたら不適格になりまして、身体検査でオーストラリアに入れなかった。あるいは、プログラムに参加することができない、奨学金を受けることができないということが、その1つの理由になっております。または、家に残した家族を見てもらう人がいないので、その養成計画に参加することができなかった、ということもあります。

女性が子供を連れてオーストラリアに来る場合には、奨学金をもらっても、自分の子供の保育まで面倒を見てもらうことはできないので来られないということがあって、参加できないことがありました。

私どもとしてはそういう問題をどうやって解決するかについての解決策も検討しているところです。ひとつは大学に保育施設を設けることも考えられています。ここ数ヵ月において、私どものトレーニング・プログラムに参加するために障害となる要素はどんなものであるか、という検討が行われるようになっております。

エイベン： 私どもの方でも3年くらい前に、そのような検討を行っておりますので、資料をお求めであれば差し上げたいと思います。WID局について簡単に申し上げますと、1つの問題として、イギリスの社会人類学的な検討から見てみますと、ジェンダーの問題を取り上げた専門家について見てみますと、男性の同僚から抑圧されているような場合があるわけです。あるイギリスの女性は、イギリスの大学に

おける女性の文化人類学者の立場に関する研究を行っていますが、恒久的な職場を得ることは非常に難しいことがしばしばであると報告しています。

そういう事実から、例えば、イギリスの文化人類学とイギリス政府との開発の連携は難しくなってきている場合もあるわけです。そういう事実においては、私どももわれわれの男性の同僚を説得し、この問題に対する認識を高めようとしているところです。

質問者8： 日本社会とイギリス社会が共通した性質を持っているので、イギリスの経験が日本のために役立つのではないかとおっしゃいましたけれども、私もその通りだと思います。日本の開発援助において、決定するのに大変時間がかかるのですけれども、決定をしてしまうと比較的スムーズにいく、と国際社会において私どもはそのように考えています。ですから開発において、女性の役割は大変重要であるということを、日本の大きな影響力のある組織の政策決定者たちが、本当に理解して、決定していくことが大事だと思います。

エイベンさんはご自分の組織において、長い間にわたっていろいろな努力をなさったとおっしゃいましたが、デモンストレーション、それからパスエージョンですか、実際にそうした説得をする努力をなさっていた間に、どんな困難に遭遇されて、その困難をどのように克服なさったのか。そうした経験を教えていただくと、私たち日本人にとっても大変役に立つのではないかと思います。

エイベン： 失敗と苦い経験、すべてを覚えているならば、大変なことになると思うのです。それを思い起こすならば、これから仕事を続けていく勇気をなくしてしまうくらいなのです。皆さんも経験しておられると思います。

楽観的な考え方、そしてエネルギーをつねに出していこう。そういう考え方こそ私どもの大きな力になるわけです。DACのWIDグループの大きな力となっているのも、楽観的な考え方とエネルギッシュな意気込みです。いろいろなかたちで、アドバイスや助力をいただいて、お互いに苦い経験に関してはかみしめ合い、お互いにそれならこうやって見てはどうかというアドバイスなり助言などを与え合う。そしてお互いに相手を助け合いながら仕事を続けていく。友好的、国際的な雰囲気のなかで助け合って仕事をしていくことが鍵ではないでしょうか。

司会： 聴衆の皆さんの方からたくさんご質問をいただきまして、ありがとうございました。まだ皆さん方、たくさんご質問があると思いますけれども、時間になりましたので、このあと、皆さん方ご参加いただきまして、講師の方々とのフリーディスカッションをお願いしたいと思います。

本日は講師の皆さま、そして聴衆の皆さま、長時間どうもありがとうございま

した。

資料　1

The Utilisation of Gender Analysis in Feasibility Studies and Project Design

INTRODUCTION

Australia's Women in Development Policy is formulated to achieve the following objectives:

- Improve the developmental effectiveness of AIDAB programs by taking account of women's as well as men's needs and preferences in the planning, implementation and evaluation of aid projects.

- Strengthen the impact of Australia's development assistance program by securing the participation of both women and men in its planning and implementation.

- Increase the productivity of women's activities.

- Promote a balanced share in the benefits derived from development assistance for men, women and children.

WHAT IS THE GENDER ANALYSIS FRAMEWORK?

The gender analysis framework is a mechanism for organising and assessing socio-economic data relating to the target populations affected by development activities. Five components are used to provide a broader picture of the inter-linkages between a variety of community structural variables. These are:

- an "activity profile" which delineates the gender-specific division of labour;

- an "access and control profile" which examines who has access to and/or control over valued resources such as land, credit, equipment, etc, as well as potential project benefits;

- an examination of cultural determinants influencing activities, access and control, such as legal or religious factors;

- an analysis of the implications for project design, of the major identified aspects of;
  - division of labour
  - access of and control of resources
  - cultural determinants

- and finally a project cycle review system which incorporates gender-related concerns into an on-going monitoring process.

Such a systematic collection of baseline data identifies gender-specific needs, inputs, and impact which may also vary by age, class, and ethnicity. The monitoring process continues to ensure that women equitably participate in project activities and share in project benefits. If necessary, project redesign will address inadequacies identified.

A. ACTIVITY PROFILE

CATEGORIES OF ACTIVITIES

1. ***The first step of gender analysis is for project planners to identify three categories of activities according to gender/age-disaggregated divisions of labour:***

1.1 The collection of gender/age-specific data relative to the *production of goods and services in each sector affected by the project,* e.g. agriculture, forestry, business, etc.

1.2 The collection of gender/age-specific data relative to *household production*, e.g. housebuilding and repair, food preparation, making and laundering clothing, fuel and water collection, child rearing, housecleaning, etc.

1.3 The collection of gender/age-specific data relative to *social, political, and religious functions*, e.g., sitting on village councils, arranging and conducting traditional ceremonies and sites, or providing volunteer community labour such as road maintenance.

METHODS OF DATA COLLECTION

2. ***A number of methods for acquiring baseline data have been successfully employed by consultants. These include:***

- secondary data collection from previous studies such as theses or anthropological case studies;
- limited household surveys;
- interviews with key informants of target populations;
- previous gender analyses conducted in the region;
- other donors' research reports on gender issues;

- documents provided by National Women's Bureaus in the country concerned.

2.1 Methodological considerations based on field trials are as follows:

Consideration 1: Determination of *quantity* of data needed is dependent upon:

- ***project size*** - additional resources, including time allowances, may be required for extensive integrated projects versus those with narrower definitions;

- ***cultural variation*** - regional differences relative to male/ female gender roles and traditions associated with such roles may affect decisions regarding the integration of women into the project, and if attention is not given to these variations there is a danger of over-generalisation. Separate gender analyses or profiles may be necessary.

- ***level of difficulty in obtaining data*** - national or provincial statistics are often unreliable given inefficiencies in record-keeping; and, distances necessary to travel for random sampling may be unrealistic given lack of mobility, costs, including time. Country program desks may on a case by case basis decide to invest more project resources in collecting additional primary data.

Consideration 2: Participant observation and consultation with key informants knowledgeable about the socio-economic roles of men and women in a particular culture/region, as well as social, economic and legal constraints, may prove to generate more accurate data than a survey approach.

e.g. when asked directly, men and women tend to claim they are responsible for tasks which the other claims they normally perform, hence discrepancies occur.

Consideration 3: The gender, age, class, race, ethnic background and occupation of the interviewer/interpreter may indirectly influence the validity of the interviewees' responses. The more evenly these are matched, the greater the potential for higher quality data collection.

Consideration 4: Including a social scientist on the consulting team who possesses a *sensitivity* to women in development issues and has had successful cross-cultural

interviewing experiences, as well as a working knowledge of the cultural milieu, is essential for appropriate data collection and design inputs. This consultant should *preferably* be from the culture/gender under study and ideally not project a class/ethnic bias.

Consideration 5: Although a WID specialist may be included on a team, each team member is responsible for collecting gender-disaggregated data in their designated sector(s). The WID specialist is responsible for assessing such data and incorporating it into the final gender analysis and project design.

3. *Additional data useful in activities analyses:*

3.1 Where are the activities performed? Periodically, knowing where work is performed may provide insight into why labour is divided in a particular way or why a workplace is more acceptable to one gender versus another e.g. impact of male migration to urban areas for work may mean an increased workload for women.

3.2 When are activities performed (time of day and/or seasonality)?

e.g. during planting and harvesting there may be shortages of labour, while during cultivation, either women or men may be fully occupied or free to participate.

3.3 How much time do these activities take?

e.g. The design of a project which increases time requirements for particular activities must consider these in relation to time required for existing necessary activities.

SAMPLE ACTIVITY PROFILE

COCOA PRODUCTION

Functional Activity	FA	MA	FC	MC	FE	ME
Clearing heavy bush						
Clearing light bush						
Planting shade						
Planting cocoa						
Pruning						
Spraying						
Weeding						
Harvesting						
Breaking pods						
Fermenting						
Drying						
Grading						
Hand sorting						
Bagging						
Selling						

SUBSISTENCE

Functional Activity	FA	MA	FC	MC	FE	ME
Fuel collection						
Water collection						
Child care						
Meal preparation						
Home gardening						
Marketing						
Preparing shell money						
Laundry						
Caring for chickens						
Caring for pigs						
Sewing						
Weaving baskets/mats						
Managing a shop						
House cleaning						
Preparing feasts						
Baking bread						
Fishing						
Funeral preparation; sing-sings						
Construction work						
Hunting						

CODE: 1/ FA - Female Adult; MA = Male Adult; FC = Female Child;
MC = Male Child; FE= Female Elder; ME = Male Elder

2/ Percentage of time allocated to each activity; seasonal; daily

3/ Within home; family,field or shop; local community; beyond community

4. *Project design implications:*

With respect to the Design Document, gender-specific issues should be clearly addressed in the description of the activity setting, the analysis and formulation of the activity and the activity design. As much as possible, women should be integrated into mainstream project activities rather than treated separately, although women-oriented activities and components in some instances may be a first step.

4.1 Is the planned component consistent with the current gender designation for the activity?

4.2 If it plans to change women's performance of that activity (i.e., location, technology, time allocations, etc.) is this feasible and what positive/negative effects will potentially occur?

4.3 If it does not change women's performance of the activity, is this a missed opportunity for women's roles in the development process?

4.4 How can the project design be adjusted to increase the identified positive effects and reduce or eliminate negative ones?

Women's seasonal labour constraints may be addressed by adaptations such as:

- project activities are suspended during planting and harvesting months;
- labour-saving devices for both the field and household may be introduced;
- provision of convenient water supplies;
- training activities may be shifted to times and locations which are convenient for all.

B. RESOURCES/BENEFITS

Access and Control Profile: The *flow* of resources and benefits is fundamental to analysis of how projects will affect and be affected by women. What access do individuals have to resources to carry out their activities and what control do they have over the benefits from these activities?

1. It is important to differentiate between access and control: access to a resource does not necessarily imply control over the use of that resource.

2. It is also important to distinguish between resources and the benefits derived from use of those resources. Even where women have unrestrained use of resources, they are not always able to control the gains from their use.

The following Table is a guide to summarising this information.

SAMPLE ACCESS AND CONTROL PROFILE

Resources	Access (M/F)	Control (M/F)
Land Equipment Labor Production Reproduction Capital Education/Training		
Benefits	**Access (M/F)**	**Control (M/F)**
Outside Income Assets Ownership In-kind goods (Food, clothing, shelter, etc.) Education Political Power/Prestige Other		

C. ANALYSIS OF DETERMINANTS/FACTORS INFLUENCING ACTIVITIES AND ACCESS/CONTROL

1. Gender-based roles are associated with a variety of determinants, some of which are:

- *Cultural factors* – societal norms, traditions, religious requirements and taboos, as well as social strata;
- *Economic factors* – level of poverty, inflation rates, quality of infrastructure;
- *Political factors* – legal systems, decision making processes, power relationships, and institutional structures;
- *Demographic factors* – maternal and infant mortality rates, life expectancy, migration patterns.

2. These determinants shape men and women's activities, interactions, decisions, and access to and control over resources and benefits. For project design, planners need to address the following:

2.1 Which determinants will be affected by the project?

2.2 Which factors will constrain the project? How fixed are these determinants?

2.3 Which factors will enhance the project?

2.4 In what ways can the project be adapted to accommodate the identified determinants, should there be little or no potential for change?

2.5 If a determinant is already in the process of change, how might the project affect this change?

2.6 At a minimum, project designers need to know what the determinants are and how significant their influence will be on project activities, access to and control of resources, and decision making processes. *Indirect* impacts should be stipulated as well as direct impacts.

e.g. women may have to travel far distances to market places leaving children behind to tend livestock. If transportation systems are improved as a part of a project, then children may have more time available to attend school.

D. MONITORING PHASE

1. Impact of the project components on women should be monitored separately from impact on men. Potential output indicators include:

   - cash income
   - workload
   - health improvements
   - access to training/extension services
   - access to credit
   - access to land, water, animals
   - access to appropriate technology and equipment
   - relationship between men and women

1.1 Are there appropriate opportunities for women to participate in project management positions?

1.2 Are control procedures in place to ensure dependable delivery of goods and services?

1.3 Are there mechanisms to ensure equitable distribution of project resources and benefits to both men and women?

1.4 Is it possible to trace funds targetted for women from allocation to delivery of service with a fair degree of accuracy?

FACTORS IDENTIFIED BY OTHER DONORS AS CRITICAL TO THE SUCCESS OF INTEGRATING WOMEN INTO DEVELOPMENT ACTIVITES

(1) Women are involved in the initial planning and design of the project or are included after the mid-term evaluation.

(2) Disaggregated data of economic and subsistence activities by gender/age/class are used in planning and design in order to gauge potential variable impacts on specific groups as well as on interrelationships.

(3) An access and control profile identified limitations and/or barriers to project resources and benefits distinguishing those areas in which women needed assistance in order to benefit in proportion to their efforts.

(4) Cultural, economic, political, and demographic determinants are taken into account thus maximising women's integration into project activities.

(5) Working through existing national and provincial women's groups, although not always appropriate due to class differences between elite officers and poor women affected by the project, more often than not proved to enhance a project's success.

(6) The inclusion of local women in training programs or as project personnel ensured women's continued involvement in managerial and operational functions, and consequent access to resources and benefits.

(7) For wonen's integration into development activities to be realised, the support of local officials, most often men, was imperative.

(8) Frequently, projects which were faltering were able to realise their goals when re-designed to take into consideration gender issues.

(9) In general, when women were viewed as integrated members of the community rather than an isolated target group, women's components of projects were more

effective.

(10) Most importantly, the projects which addressed the practical perceived needs of women formulated from the concrete conditions women experience were well-received, helping women do what they already do more efficiently by providing access to appropriate technology, training and credit.

MYTHS ASSOCIATED WITH GENDER ANALYSIS

1. "Women in developing countries would not be interested in changes produced via aid projects if it weren't for political pressures within Australia mandating an assessment of impact on women."

   NOT TRUE: Women in developing countries seek to improve the quality of their lives and those of their families, and look to donors for support in a very difficult struggle against poverty and illness.

2. "Gender analysis imposes radical feminist western values on third world women."

   NOT TRUE: The purpose of gender analysis is to examine the needs, productive roles, access to and control of resources for *both* men and women within the contexts of their existing cultural environments.

3. "Integrating WID components into project designs only arouses resistance on the part of recipient governments."

   NOT TRUE: Most governments already have national women's machineries in place and have been responsive to an incremental approach of facilitating women's increased participation in economic production.

4. "Resousces needed for a proper gender analysis are overwhelming and therefore why attempt it at all?

   NOT TRUE: In many cases, the information needed for project *design* purposes has already been collected but may not be easily located. National Women's Bureaus may be able to provide access to such data. The AIDAB library reference librarians are also very willing to assist consultants in finding relevant existing data. If primary data is needed, it may not be necessary in every instance to conduct a major household survey, as carefully selected key informants may be able to provide essential answers. Caution should be taken, however, to ensure that those persons affected by the project are directly involved in needs assessment and analysis.

5. "There's nothing new to learn about women in development, women are members of a family unit and if aid projects improve the family's income, women will be better off as will the entire family."*

   NOT TRUE: It does not necessarily follow that if income is generated for a family's use, women and children will benefit given potential lack of control over use of additional resources. Special needs of female heads of households must be taken into account as well.

6. "Many projects such as institutional strengthening and infrastructural support have little to do with impact on women, so why consider gender analysis for every aid program."

   NOT TRUE: On the Contrary women may be significantly affected by changes in tax structures, construction of roads, bridges, wharves, etc.

7. "But women are traditionally the keepers of culture."

   NOT TRUE: What that really means is that whilst men progress - women stand still. The "culture" often does not have its origins in "mists of time", but can be a recent adaptation in response to a set of problems.

8. "Women-specific and/or women-oriented projects provide the best way to help women."

   NOT TRUE: These types of projects often marginalise women even more and result in "removing" them from their socio-economic groups, e.g., as farmers, traders, etc.

資料 2

CHECKLIST FOR THE PARTICIPATION OF WOMEN IN DEVELOPMENT PROJECTS

This checklist is to help ODA staff when they prepare, monitor and evaluate projects.

Part One serves as an aide-memoire on the role of women in development.

Part Two addresses project design in relation to the preparation of the project framework.

Part Three (attached separately) asks a series of questions which should be answered to meet ODA's requirements for statistical reporting to the DAC.

The Social Development Advisers are available to advise on any of these issues and when in doubt desk officers and professional advisers should seek their assistance.

PART ONE

GENDER

Biological differences between men and women do not change but the social roles that they are required to play vary between different societies and cultures and at different periods of history. 'Gender' is the term used to describe this social differentiation.

GENDER ROLES

For example, in India, unskilled construction work is accepted as 'women's work' while in parts of Africa and Latin America this is identified as 'men's work'. In most developing countries there is a broad pattern of men having a single productive role while women have dual roles productive and domestic (or reproductive). Women's productive role is often under-valued or given little recognition. Roles can change over time: in Europe and North America men's role in domestic activities is becoming increasingly important.

GENDER NEEDS

Because men and women have different gender roles they also have different needs. **Practical gender needs** are those needs of women (or men) connected with their existing roles in society: what people need to do their current jobs more easily or efficiently. Projects can be designed to meet practical gender needs without necessarily making any impact on the position of men or women in society. In contrast, **strategic gender needs** are about changing men and women's roles. Most governments now endorse the need to improve women's status and have policies of equity and equal opportunity. However, the

cultural and legal status of women is still often circumscribed and so specific interventions may be taken by governments to improve women's position.

Activities which address practical needs of women could include:

- reducing their workload. Eg, stand-pipes and hand-pumps; grinding mills; ox carts.
- improving their health. Eg, trained village midwives; primary health centres; child spacing/family planning advice; clean water supply.
- obtaining improved services for their families. Eg, immunization; primary schools; inputs for foodcrop production; housing.
- increasing incomes. Eg, credit groups; skills training; access to markets.

Activities which address strategic needs of women could include:

- Improving education opportunities Eg, hostels for female students; gender neutral text books; female teachers as role models; literacy classes; overseas fellowships.
- Improving access to productive assets Eg, rights to agricultural land; rights to common property (trees, ponds, etc); bank accounts.
- Improving participation in decision-making Eg, committee membership; participation in elections; managerial positions; establishing and supporting women's groups.
- Gaining equal opportunity for employment Eg, jobs traditionally reserved for men are opened for women; equal wages even if there is a gender division of labour.

NEGATIVE IMPACT

Faulty project design can result in failure to address women's needs or can inadvertently make women worse off, practically or strategically. Eg:

- land registration in the name of the head of the household (considered male) resulting in loss of women's rights.
- urban housing projects ignoring female headed households.
- agricultural mechanisation displacing hired female labour.
- new agricultural practices (Eg, line transplanting of rice meaning heavier workload).
- new committees established excluding women members thereby reducing

women's opportunity to participate in community decision-making.

- new information not designed to reach women so they no longer have equal access to knowledge.
- switch to cash crop production resulting in men gaining more control over household resources.
- design of new roads failing to accommodate women's need for access to roadside marketing.

PROJECT EFFECTIVENESS

Projects also often have objectives which are not directly related to the needs of beneficiaries. Projects may fail to achieve these objectives if they ignore gender roles and needs. Eg:

- the productive role of women in agriculture when the project objective is to increase national foodcrop production and yet extension programmes reach men only.
- the role of men in some countries in buying food, when the project objective is to reduce child malnutrition and nutrition education programmes are targeted at women only.
- the practical needs of women to graze domestic livestock when the project objective is commercial afforestation.

PART TWO

The project framework

To what extent do wider or immediate project **objectives** meet women's practical or strategic gender needs? Are women's practical or strategic needs mentioned as objectives? If women are not mentioned, what are the reasons?

Which projects **outputs** relate directly to women's needs? How do they relate? Are their outputs which may have a negative impact?

Is provision made to monitor and evaluate the **impact** of the project on women? What factual **indicators** would be relevant?

Are the means of **measuring** these indicators appropriate for assessing the impact on women?

What **assumptions** are made about the position of women in society? Are these explicit? Are they correct?

Are **inputs** adequate and appropriate for meeting women's needs? For project effectiveness?

Availability of basic information

What socio-economic information on the gender roles and needs of the target group is already available?

- For example: – the division of labour in productive activities; the structure and size of households, and stages in the life cycle.

What additional information is required on gender roles and relations at the household level?

- For example: – the division of labour, by age and sex, within the household, including seasonal differences; sources of household income, including off farm

activities; control and decision-making within the household over cash, land and other resources.

What additional information is required on gender relations at the community level?

- For example:- the structure and composition by age and sex of community- level decision-making bodies

If more information is essential, what arrangements are being made to obtain it? Has a gender perspective been incorporated into terms of reference for project preparation and appraisal missions?

PART THREE

Questions for Reporting to the DAC

	Y	N
1. Are women the primary and main target group (agents and beneficiaries) of the project?		
2. If not, are women identified explicitly as part of the target group (agents and/or beneficiaries) of the main components of the project?		

If yes to either of the above the following questions should be answered:

	Y	N
3. Have women, whose lives will be affected by the project, been consulted during project design and does the project document explain how this was done?		
4. Does the project document make it clear how women will be involved as active participants in project implementation, not just as beneficiaries or as a source of manual labour?		
5. Are barriers to female participation in the project identified in the document and have measures been designed in order to overcome these barriers?		
6. Does the project provide for expertise in the gender aspects of development to be utilized throughout the project cycle and does the document make it clear how the expertise will be used to address gender issues?		

WID specific: Yes to question 1, plus yes to questions 3– 6

WID integrated: Yes to question 2, plus yes to questions 3 - 6

WID relevant: Yes to question 2, and yes to at least one of questions 3– 6

WID not relevant: No to all questions

This should form the basis of your reply at line 18 of the computer-generated commitment notification form (or line 19 of the old notification of grant or loan commitment form).

See OP III A/8 (Annex 1).

国総研セミナー
－各援助国の「開発と女性」への取組み－

1991年10月発行
編集・発行：国際協力事業団国際協力総合研修所
〒162 東京都新宿区市ヶ谷本村町10－5
電話 (03) 3269－3374

JICA